



圓光大師傳

十五十六



法然上人行状畫圖第十五

慈鎮和尚号吉水僧 正慈圓、法性寺殿忠通公の御息青蓮院

乃覺快法親王鳥羽院 弟七官、附弟山門乃樞鍵秘教の棟

梁りやうりて。三昧の一流秘決を伝へ、真義をさし、

山勢四箇度興隆ひびひびにふえ、名望世よまじり、

まへりまじり、我も宿習しゆくおき、其開發かいはつ、其こゝろも、まきりに

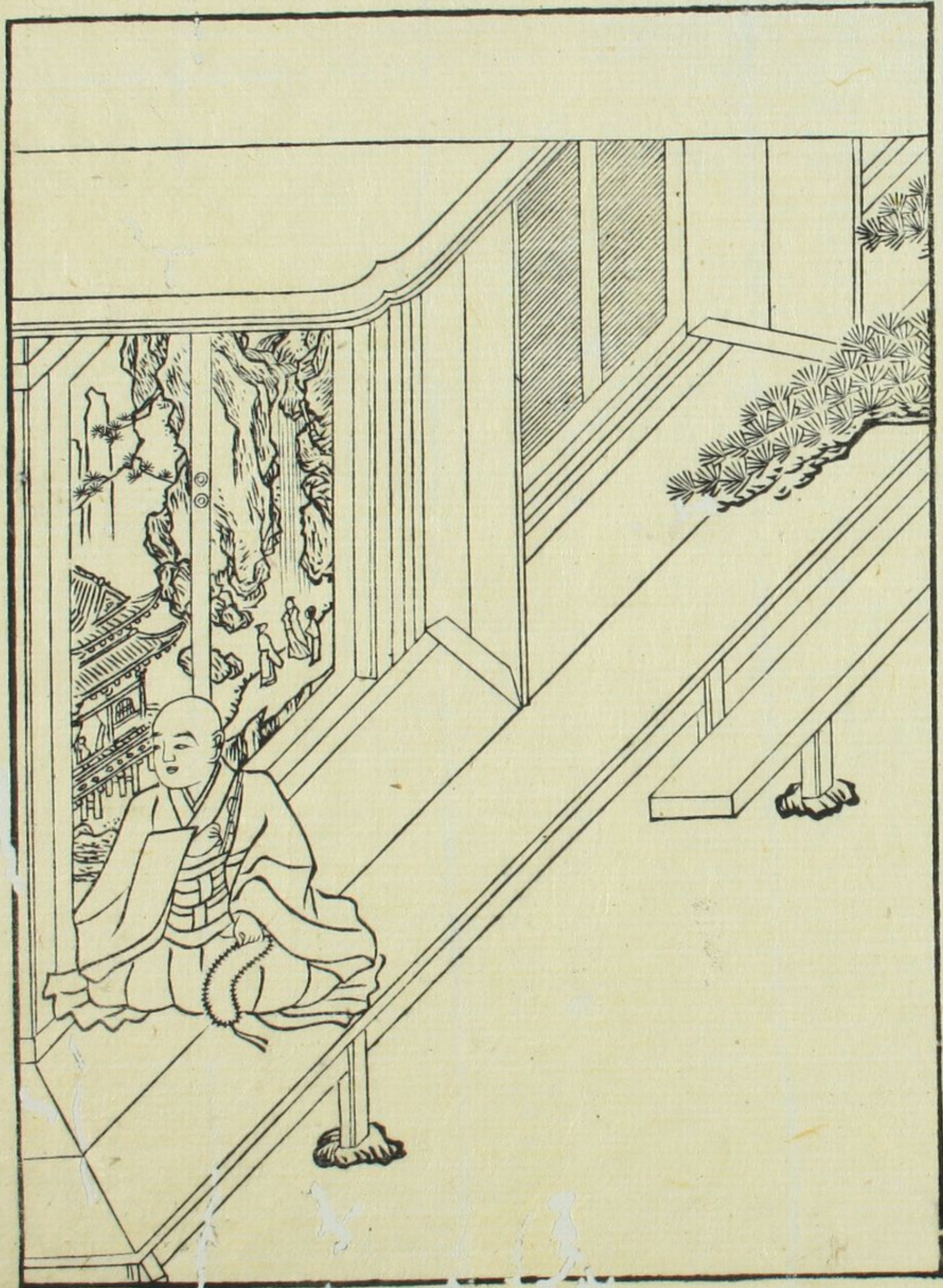
世間の榮耀えいようをいふ、いふ、出離しゅり、其要道えうだうをたたり、

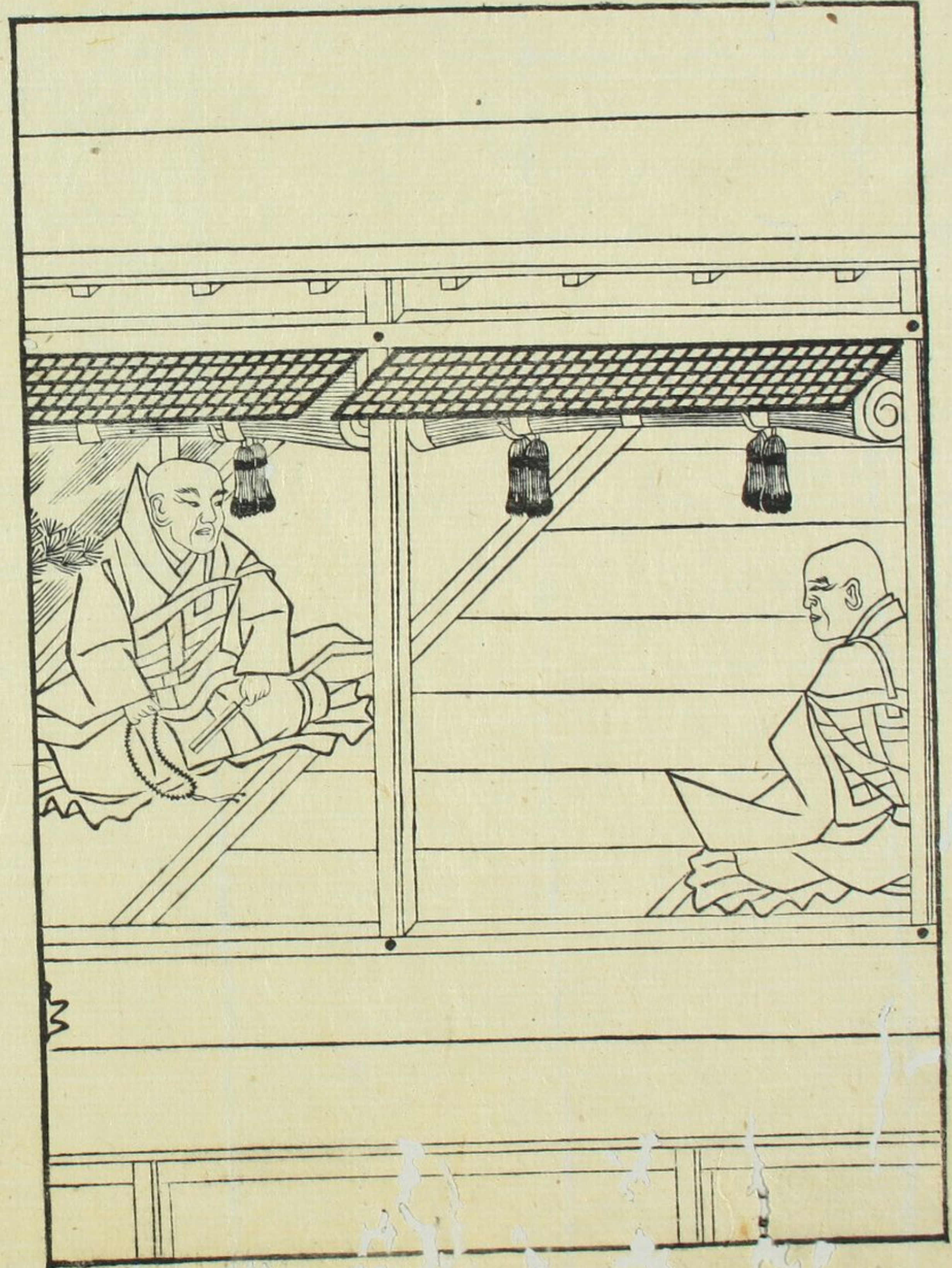
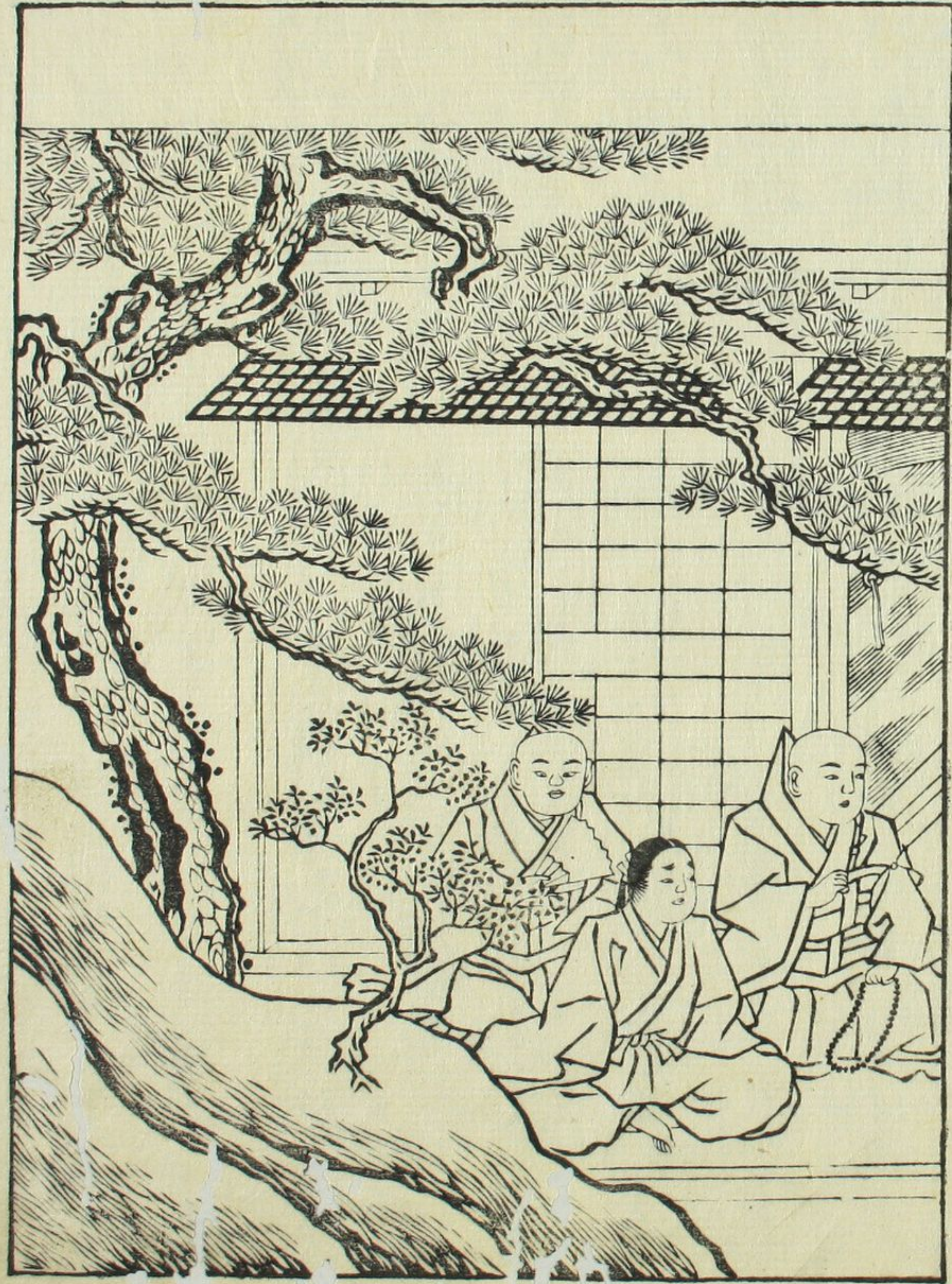
道みちの志こころざしあり、す、す、より、籠居ろうきの臘ろう、其こゝろも



分りにあへて勅許たりけしむいぞれ本意をさげら
まゆといへどもある時志々々西山の善峯寺に龍居
して心閑よほらぬをこあれきたるにいつら勅使
ひまれく志つわに召出さされよ々々それ後ハ
隠居乃ともまひもかふいざりたれんばよに上人よ
御對面ありて底下れ凡夫開悟得達れ要義を談せ
らまざるに上人諸宗れ大綱をあげく一これ義理を
はくはるくに皆是上代上機のそあれをうへりて

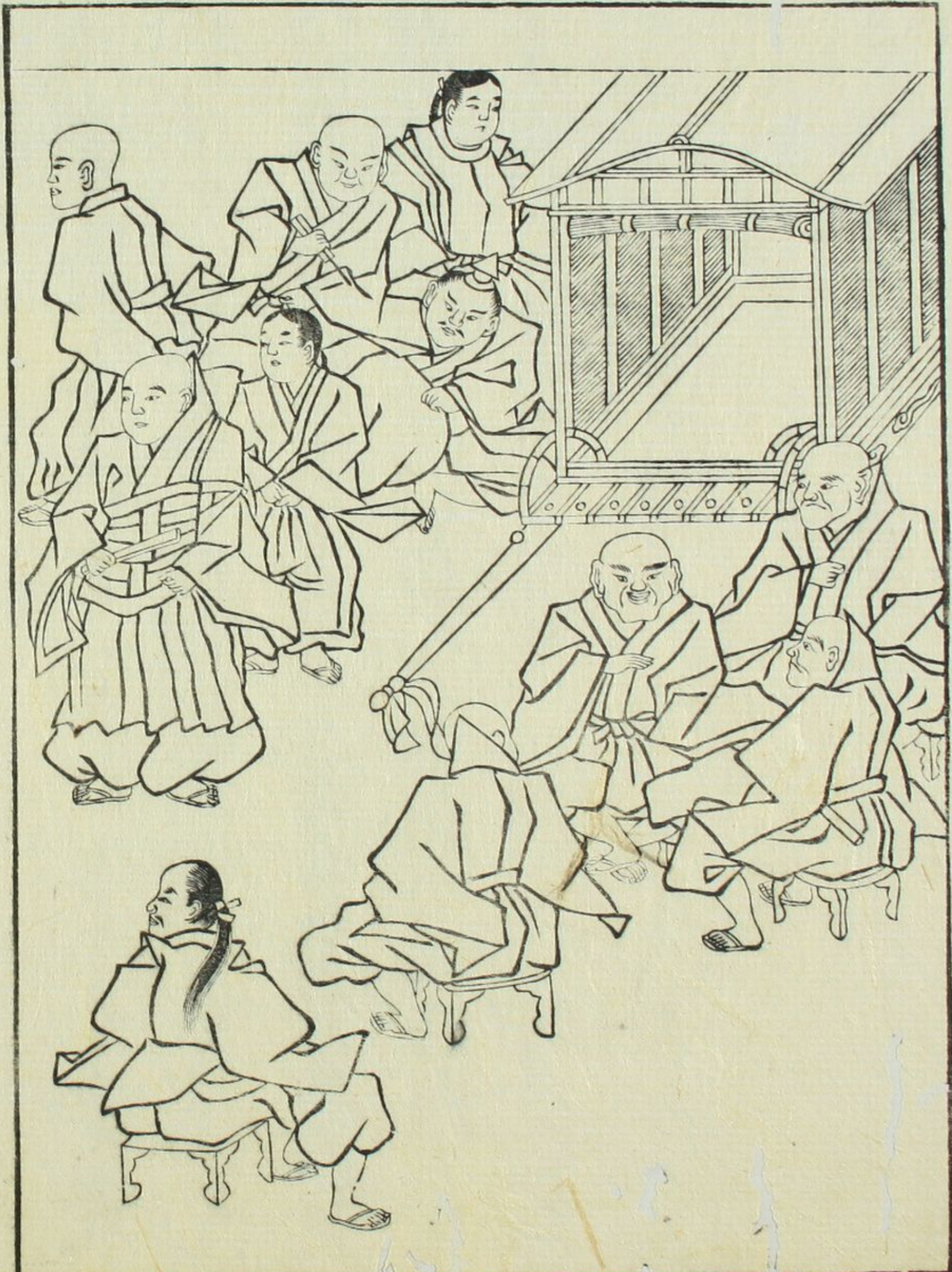
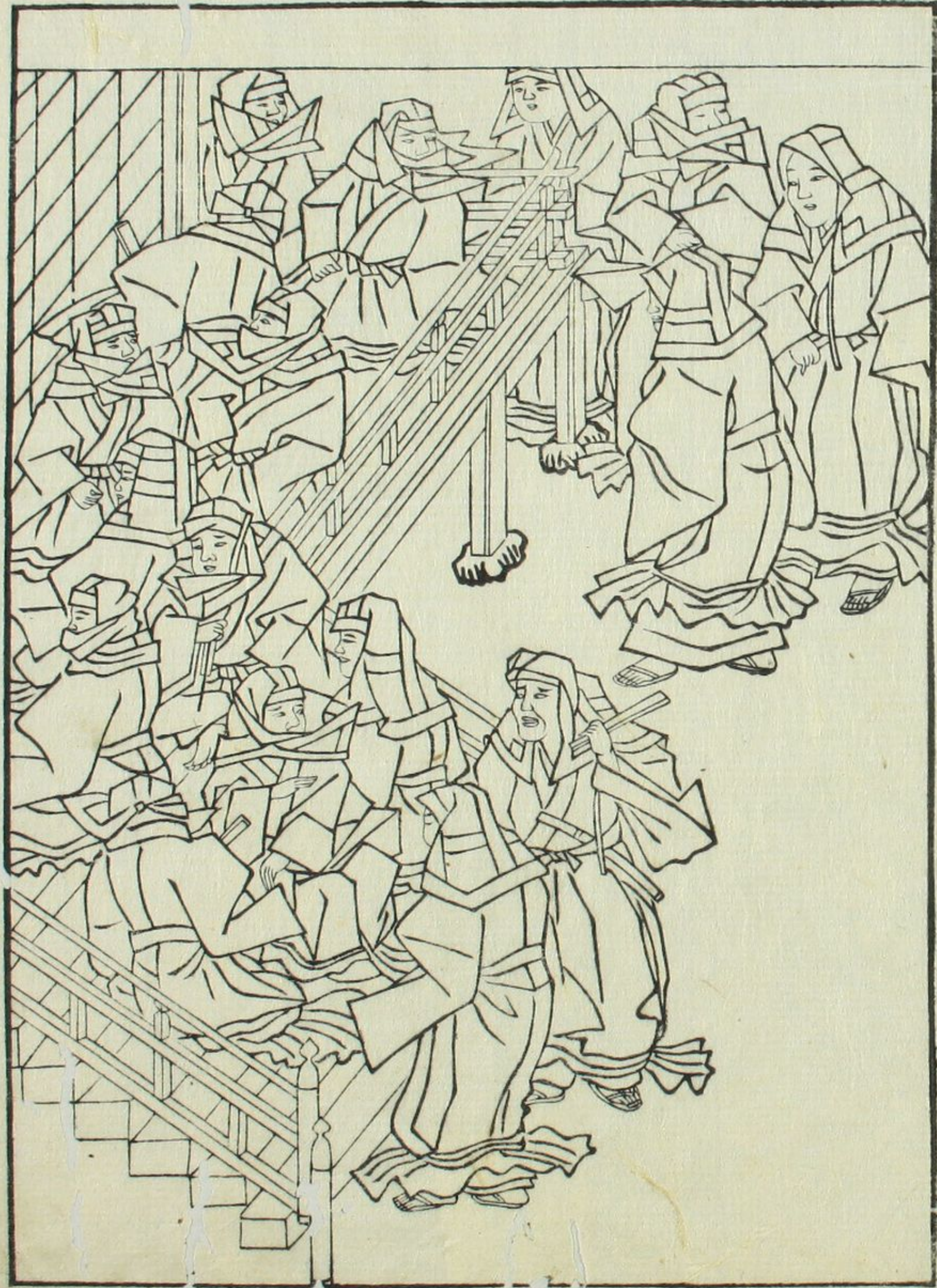
未代下根れきどいをよびごう。浄土れ宗旨稱名の
本願のそぞ苦海れ船師愛河の橋梁よそ愚鈍下
智の當機よあひるをへりて聖道浄土れ真義をの
あつれをまば和尚随喜れ御心秘んるあつて一乘
圓頭れ戒をうけ散心稱名の行をぞ崇重せられけ
る

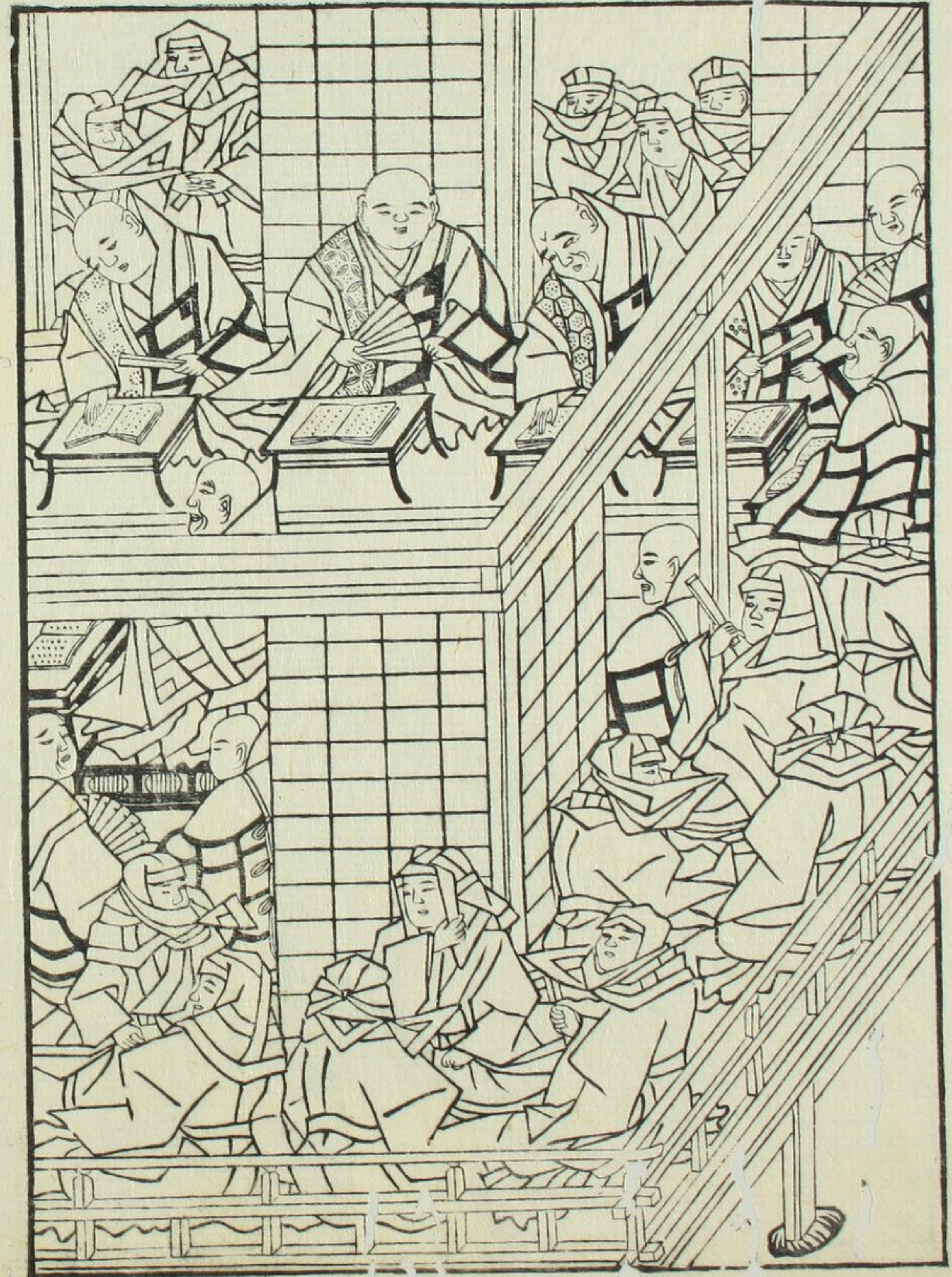
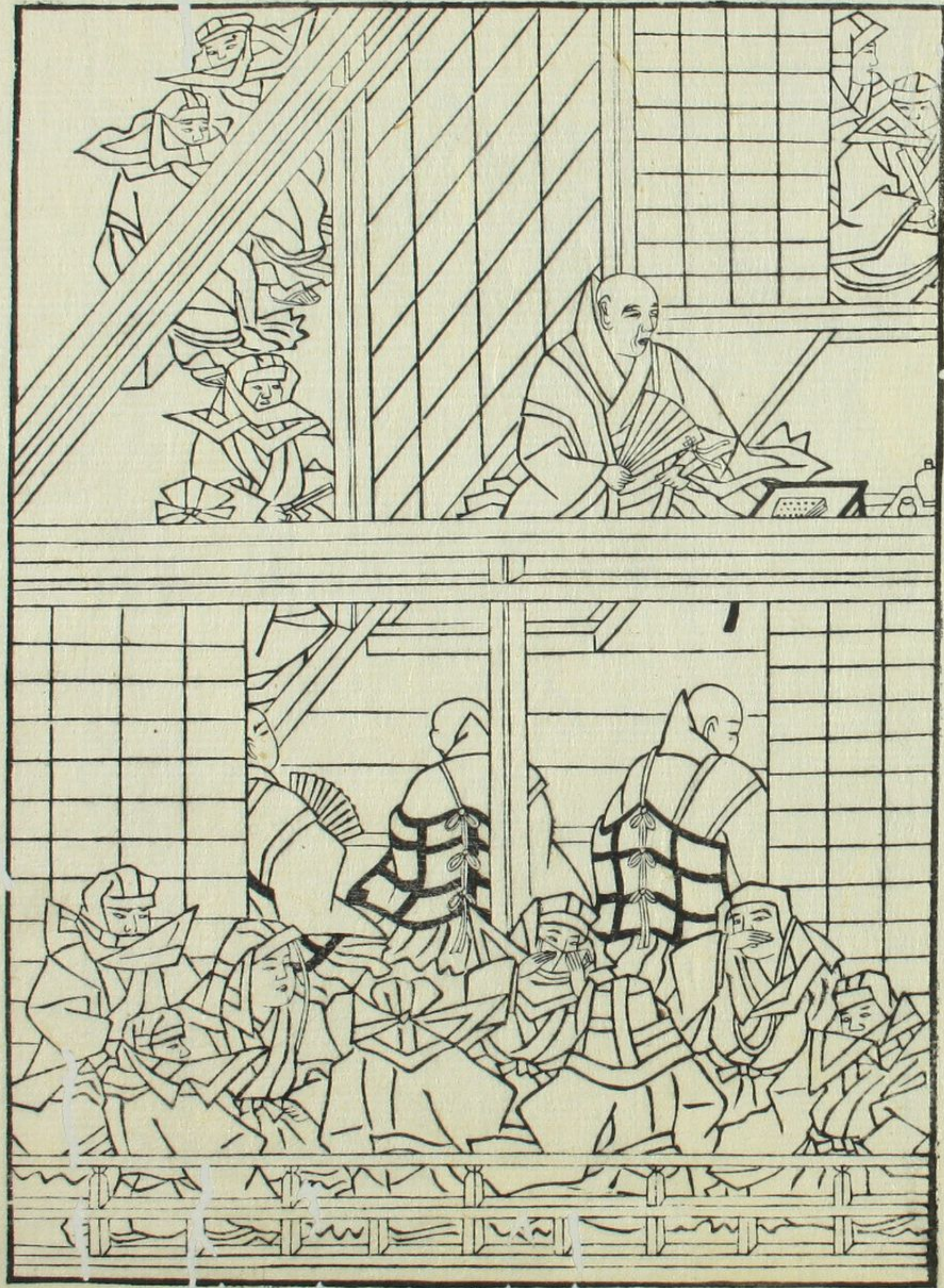


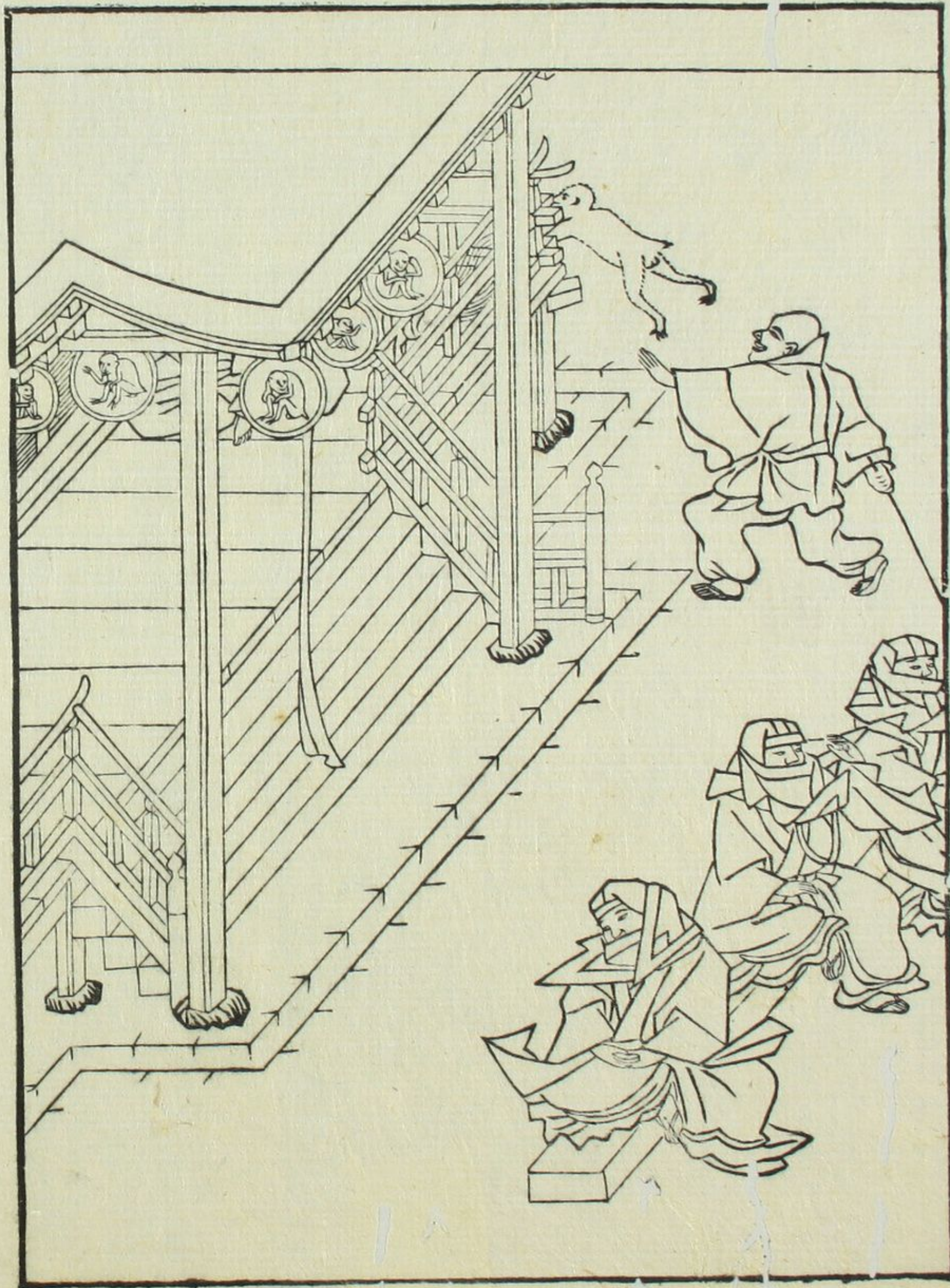
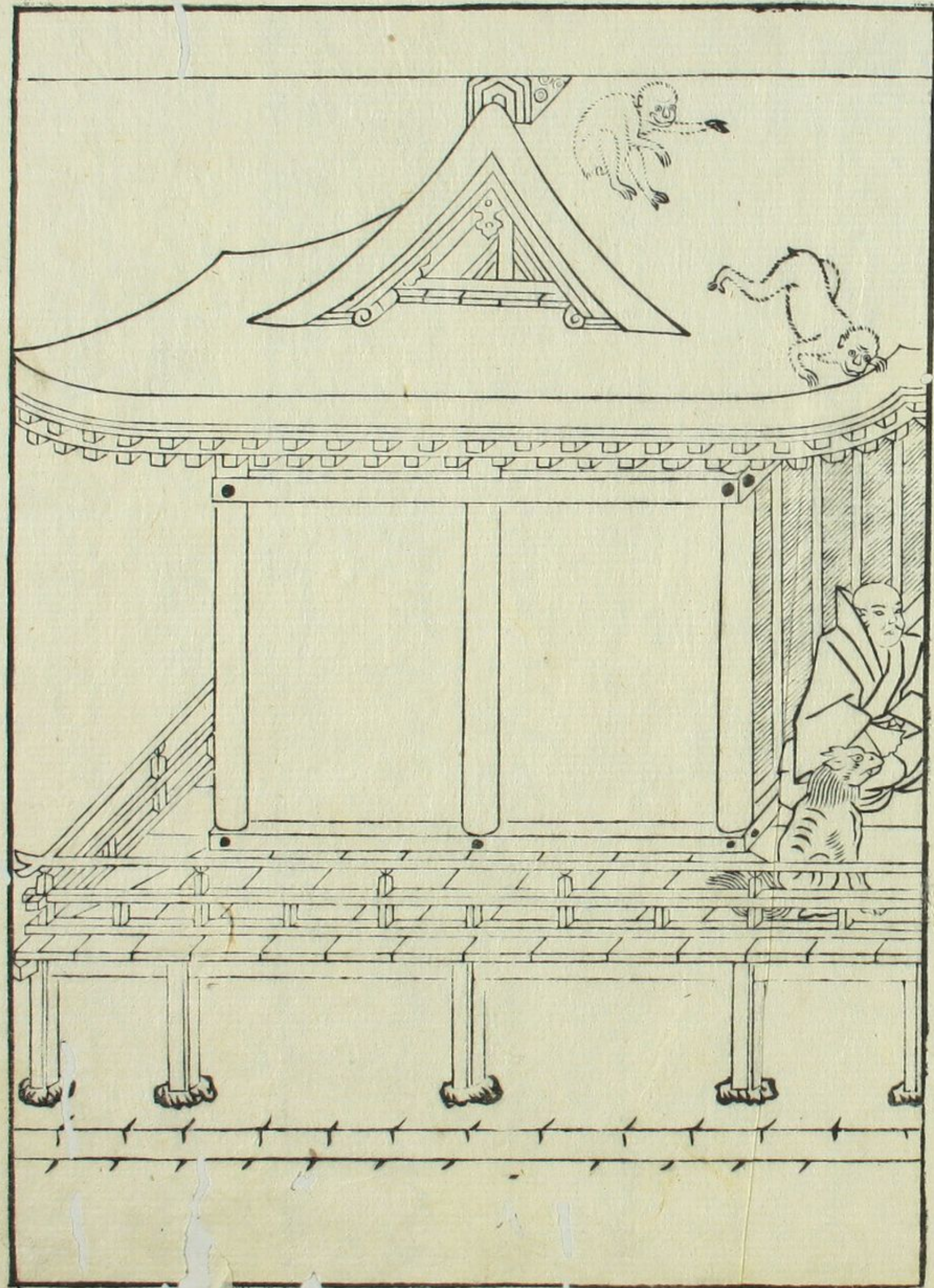


本願の旨趣をうけしひ極樂に往生候のぞきましく
 たる餘もや。建仁元年九月二十二日より七箇日之間。
 日吉聖真子乃拜殿よりして實圓實全仁慶良淳已
 下二十餘人門弟をともひて且本地弥陀の内證よ
 資し。且垂跡明神の外用をうけし人々ために慈覺
 大師の古風を志し。西方懺法をたをさかた
 たる。六時其時より高聲念佛千遍までとあるに
 偏執我慢の大衆定めて違乱をなほすやあると

人思ひあへりあるに。七箇日之間とことくの衆
 群集とていふも皆歸敬の掌故合せし誹謗の
 くらひも候とていふ。信心無二其前よ。魔障便
 を得らるふや。見聞の諸人不思議の思をあたと
 まひといふ事たりたり







四天王寺に別當に補任せられたり時父僧正行慶
 寺務の時顛倒して後年久しくわたりて
 堂を新造して漢家本朝の往生傳をえり尊
 智法眼よたはせり九品往生れ人を畫圖よあら
 入道相國頼實公以下九人の秀才をすゑて和
 歌を詠して九品面これ行状を稱嘆し菅寧
 相下時大藏卿為長卿なりて四韻の周詩を賦せり
 權大納言教家卿色紙形をて清書せり此を家

所謂

上品上生

智覺禪師新修往生傳

九品蓮臺其家上
 詞花永馥神棲賦
 直詣西方生死斷
 炎王常拜畫圖像

杭州智覺獨當機
 宿鳥不驚寂定衣
 不經陰府古今稀
 蘓息高僧面見歸

ありしれこそやまの花のごくなよも
 よるも乃らにぞらやよむしん

入道相國頼實公

上品中生

賢劫如来放火光

六旬有限新泉路

地上蓮花生八葉

眼前兼得佛靈告

尼善慧 戒珠集

善哉善慧往西方

三昧無人舊道場

俗間花色耻餘香

九品妙甚第二望

ゆゑに蓮ハあゝとて

やゝ一ふにたそひく家

前攝政殿下 道家公

上品下生

侍從所監藤原忠季

後拾遺 往生傳

我朝朝請大夫士

勁節先彰同雪竹

三年十月黄昏淚

夢裏乘蓮西去速

二世の清祈一念深

善根高挺属雲林

上品下生舍利心

客塵自是不能侵

うゝゆめれやゝはらうらにうらまて

まぢふのたよはゆそひく

権大納言基家

中品上生

大原の貧侶臨河畔

大原沙弥 戒珠集

欲畫弥陀切獨遲

尊像未成沙暖處

浮生易滅雨來時

夜夢縱告出離道

老淚不堪憶子悲

中品上生今所示

至干舊友各相思

夕ちよ水えあきこれ河なまや
らちよあまのりくはちよら

前太政大臣 公經公

中品中生

少將義孝

保胤往生傳
有夢告

天延之比無常理

子葉落風槐體家

故苑露消室暗淡

荒原煙盡只春霞

羽林昔有雙棲鳥

夢路今攀一詠花

極樂界中詩上趣

品生所示足相加

志のよはよはに古里は梅の香を

右大將實氏

うされる中は花のやりよ

中品下生

沙門智縁

戒珠傳

昔在人間雖放逸

歸真季積智縁功

鬢花落飴羅妹鶴

羽獵發心礼世雄

晝夜三時三品觀

桑榆一暮一期終

九蓮第六託生の趣

述盡向西結大夢

とてつやわけてふは思ふ麻れまふへり
うわの山路いといいてよま

正三位家隆

下品上生

釋法敬 戒珠傳

當初法敬有遺約

身後不忘靈告專

音樂聞天遷化曉

光明入夢十三年

善哉一子出家力

遂是雙親得道緣

昔寺維那修善積

互昇下品上生蓮

立ゆゆめれそちんをくへをく
うてたのた乃と果のうははゆ

後二位民部卿定家

下品中生

覺真阿闍梨 續本朝 往生傳

尋鞍馬寺久棲遲

祈請炎王有所思

陽茂閣梨從入夢

西方覺葉不生疑

九生蓮位上中下

萬部花文讀誦持

以弟八門當此品

來緣定熟命終時

をくへいこ道はくともり月
はくれくまれひりたりなり

入道從三位保季

下品下生

釋慧進

新修往生傳

釋慧進みち負無所畜くわむ

檀施之物誰應侵たんとし

欲飛鵝うづつてん眼がん空勞眼ひやうらう

不憶おも臬心けしん還有心をへて

百部ひやくぶ花文けふもん今已滿いまにみちり

八句はつご掄景けい遂西ついに沉しづ

善哉ぜんざい下品下生げひんげせい之位

後のち在世間よそ素意深すゐひん

これれ孫まご運うんのよき此こゝに

正四位下せいしゆいげ範宗朝臣はんそうていしん

これこれかふるよ家いへ乃志なりたき

色紙しきし形かたち記銘きめい曰

貞應三年ていおう甲始かじ自去みづか冬ふゆ。三春さんしゆん子血しゆけつ夏なつ之間のち以もつ繪師えし法ぽう眼がん尊そん智ち守しゆ本ほん樣やう依よ傳でん文ぶん圖ず繪え既すで訖しやく今いま於こゝ西にし面めん更さら畫か作さく九く品ひん往むか生せい之の人ひと殊こと勸すす進しん一いつ乘じやう淨じやう土ど之の業ごう表へ裏り共ども不な交まじ他た筆ふで尊そん智ち圖ず之の以もつ詩し歌か形かたち其その心こゝろ詩し句ご九く品ひん同どう今いま管くだ丈ぢやう為ため長なが鄉きやう作さく之の和わ哥か兼かね相さう以もつ下した廣ひろ勸すす九く人にん各おの詠えい一いつ首しゆ復また當あた南なん北きた裏うら同どう畫か四し天てん像ざう此こゝ堂どう大だい僧そう正せい行ぎやう慶けい寺じ務む之の間ま顛てん倒たう之の後のち以もつ聖せい靈りやう院いん礼らい堂どう東とう廂しやう為ため其その所ところ今いま新あらた建たて立た干かん舊ふる跡あと彰あき興きやう隆りゆう之の本ほん意い也なり

別當前。大僧正法乎大和尚位慈圓記之。

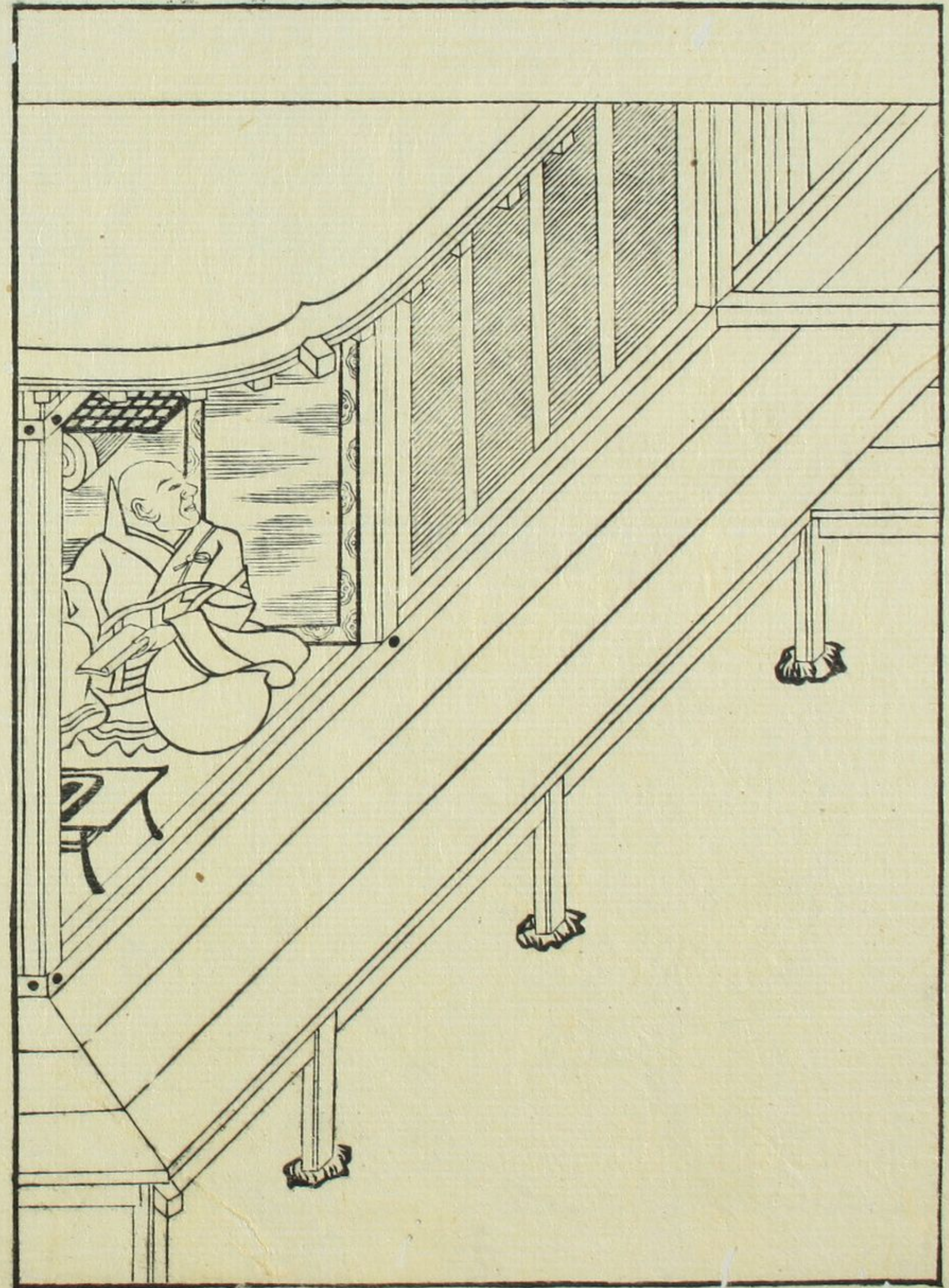
これ偏よ。ひろく諸人の心成す見えて。欣求の思成ん
げまさんためたら。尚よくに此行状を見て。誰の
人々穢悪充満のけしきをいひ。浄土不退の砌を
こひ祈がけしん。自證の得脱のこよあ。彼他乃
御志うかりな家。あわがくたうくを侍る。昨日吉
社よ。百日兼籠し。終て。後生菩提を祈申す。此
も念誦のひびに。百首の歌を詠し。終事なると。

ふたのび七社のゆい。専らけそまろ道よ。ふとれ
んをうも。家男成い。こもこふに。はを。あ。こ。め。く
こそ書付強なる。往生れのぞこめく。して。欣求の心を
と。げ。ま。さん。社。を。う。よ。稱。名。の。薫。修。日。あ。う。く。光。陰。の。運
轉。時。う。つ。ら。ぬ。や。お。ほ。し。め。は。ま。ら。ん。あ。る。時。詠。し。終
る。は

極系にまじり。わ。心。ゆ。い。つ。終。ひ。つ。れ。あ。も。こ。志。ん。く。ま。り。此
浮生は。軽く。一。思。成。淨。刹。よ。か。け。強。事。ひ。と。へ。よ。上。

人諷諫ふんせんれ火ひなりと我われど歸き敬けい他たよこころにてて。
 上人遷化せんけの時とき哀傷あひしやうにて入いりて。家初けしよの引接ひきあひを待まちり。
 中陰ちゆういんの作善さくぜんよ諷誦ふんじゆ文ぶんをしりて我われ報恩ほうおん謝德しゃとくの
 儀ぎ祈いのんこえりたりてわらふことし御臨終ごりんしゆうの後のち或人あるひとの夢
 よ示しらまさるはやうしもも苦勞くろうせり顯密けんみつの誓ちかいし物
 此用こゝよもたくはし時ときとせりて室觀しつくわんと稱名念佛ねんぶつがり
 ぞ後世ごせい乃資糧しりやうとはなりたとそ信しんずれたりる





月輪の禪問の御息。妙香院の僧正。良快ハ。慈鎮
和尚。附法として。大師正嫡の跡をうけ。顯密
兼学の宗匠たりき。此も宿縁の内よきよ
不し。是なるもや。上人の勸化。歸一多まひ。狀
離穢土。思ひつく。欣求浄土の願。祈んぐる。如り
し。偏。彌陀の本願を信じて。念佛を行じ
給ひ。淺近念佛抄を記して。無智ハ。革改す
り。彼序のこと。まハ。本覚真如。如月。

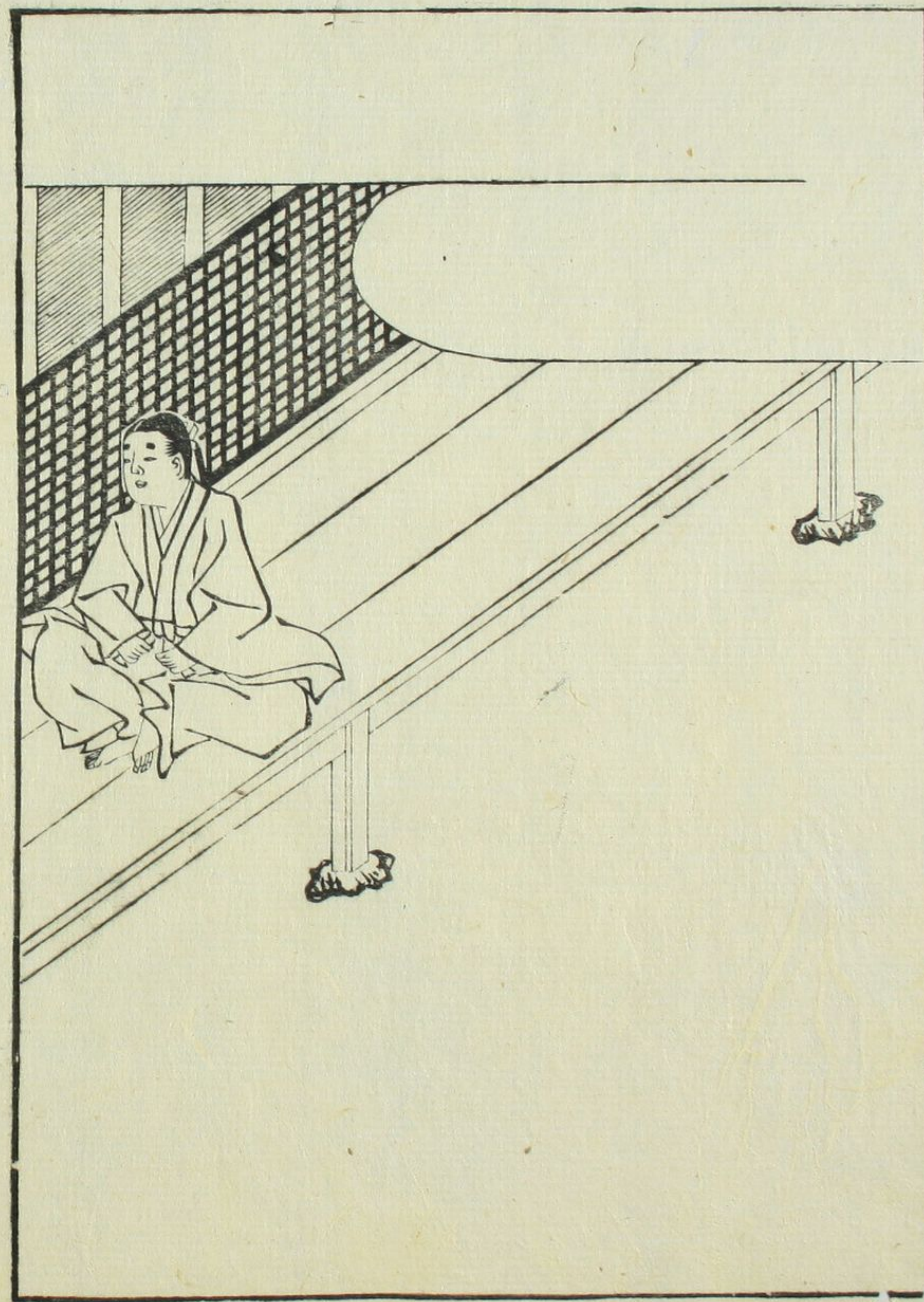
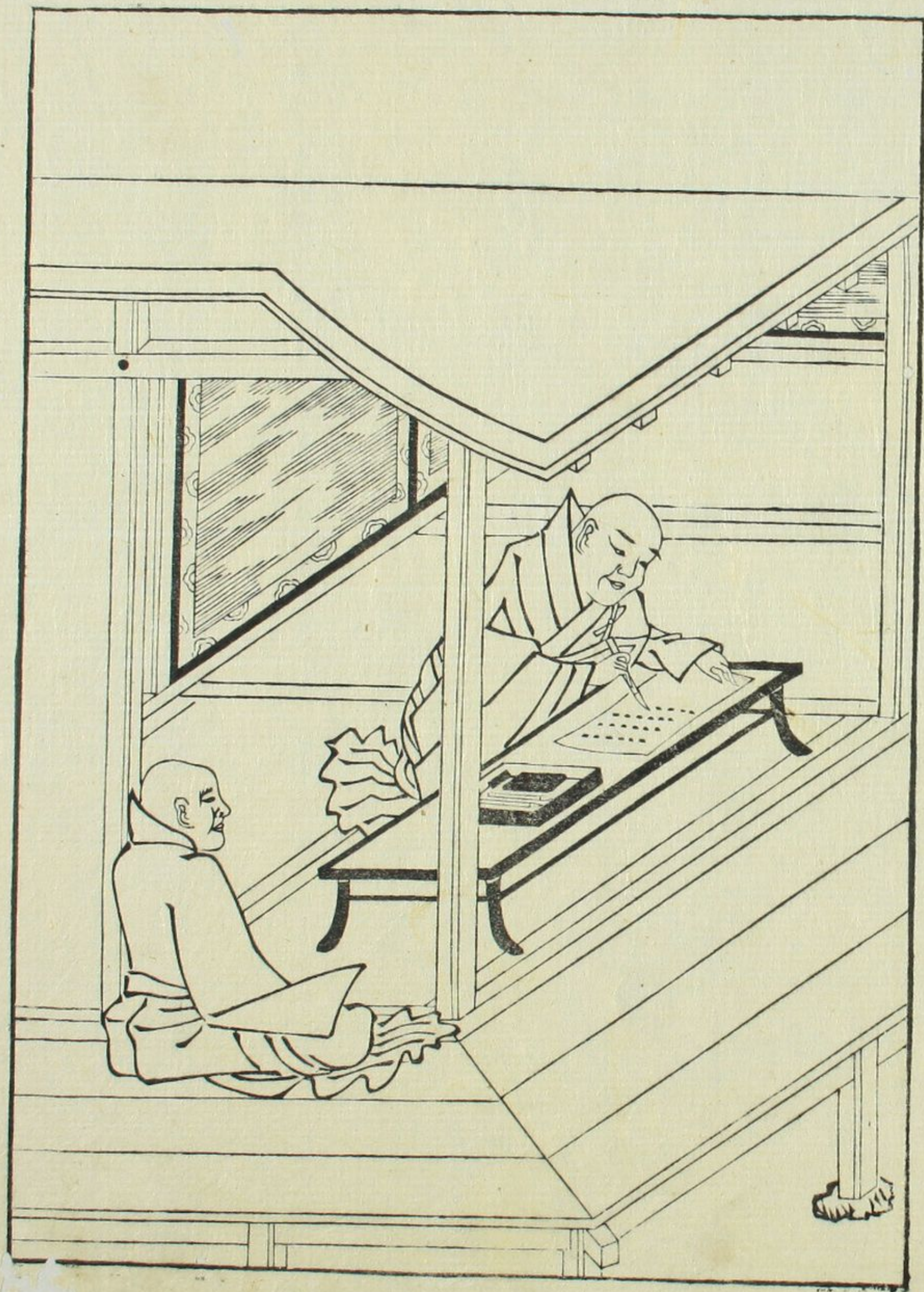
無明戲論。此雲。りか。我。常住佛性の蓮。生死
妄染。乃泥。よ。つ。ま。つ。り。この。或ハ。燒
熱。大。燒。熱。此。炎。に。咽。び。く。多。百。千。劫。塵。數。此。諸
佛の出世を。を。す。或ハ。紅蓮。大。紅蓮。此。氷。よ。也
ら。此。て。無量。億。生。恒。沙。此。如來の化導。少。を
え。ま。り。或ハ。餓鬼。城。に。入。く。一。萬。五。千。歳。飢。饑
此。ま。へ。此。こ。或ハ。畜生。道。に。墮。して。三十
四億。類。殘。害。の。こ。こ。い。く。た。ま。り。人。中

此生涯うへへも。餘洲よありて佛法をまじは。
も我よ天上に報は感すとひとをも。快樂にやこ
りて浄業を修むる事れ。而今南瞻部洲佛
法流布に國よじまされて。西方淨刹依求指南
の教を得たり。此をび出離の直道より赴きは。
いよいよの時より菩提乃正路より向ふま。就中一
生涯はれはむもわなまき奉る後乃て幻れし。
五盛陰乃待てある。且もやせん暮るやせん。志

の心よ煩惱内よこよなり。悪縁外よひきて。此
しつらよたごころく輩すくれく。その動をいれ
たふひも我なり。頓死もくわまにや。病重病
のたのぼりも老は待てり。誰うはる。今
日それ日よあつた。争志も我身その類よ
あはす。は無常ははけ。忽よま。有為
のよ。かなくかられ。一善れ。過去
たよ。三途の底よ墮。過去

漫く流轉りてんとてよかきなり。未来永いくの輪りん
廻ま又また然しかる。いそいで出離しゆりの要術えうじゆつを求めよ。更
よ生死しんじの妄報まうほうよ着ちやくとる。これをも愛あいよ。弥陀みだつの
念佛ねんぶつハ諸教しよきやう所讚しよさん多た在在弥陀みだつ。大恩たいおん教主きやうしゆとてよ
これ佛ぶつ哉や稱讚しやうさん一いったよ。弥陀みだつ一いっ教きやう利物りくぶつ偏増へんしゆ未
代の我等われら家かの因いんを修しゆる。誠まこと是こゝろ未代みだい相
應たうれ要法えうぽう。凡夫ぼんぷ易行いぎやうの直道ちきうだうたる者もの歟や。これゆへ
初心しんしんの行者ぎやうじやれ。これ念佛ねんぶつの簡要かんえうを志しして。おて

七段として。九品を期きと。取詮しゆせんとてかきたる



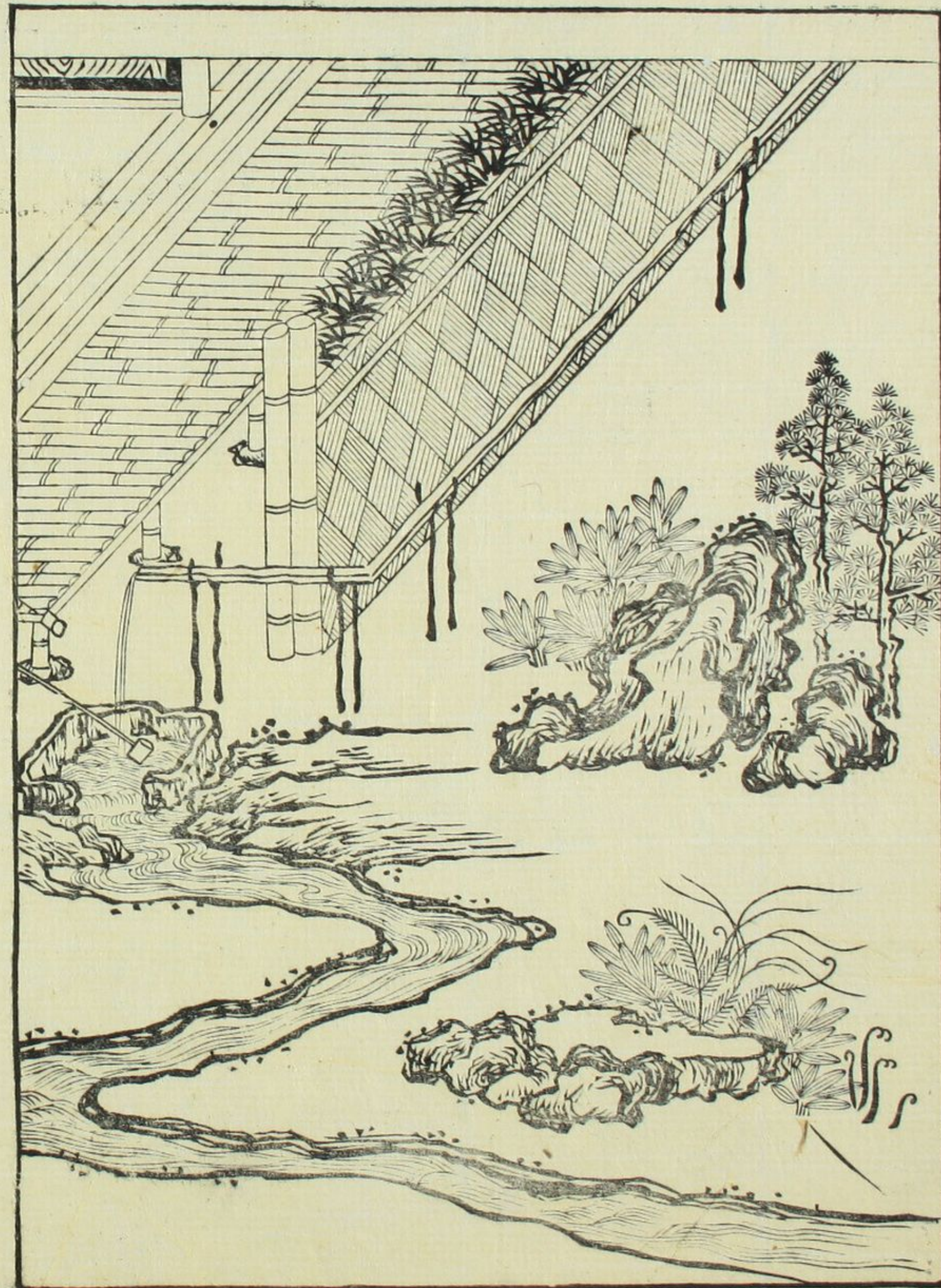
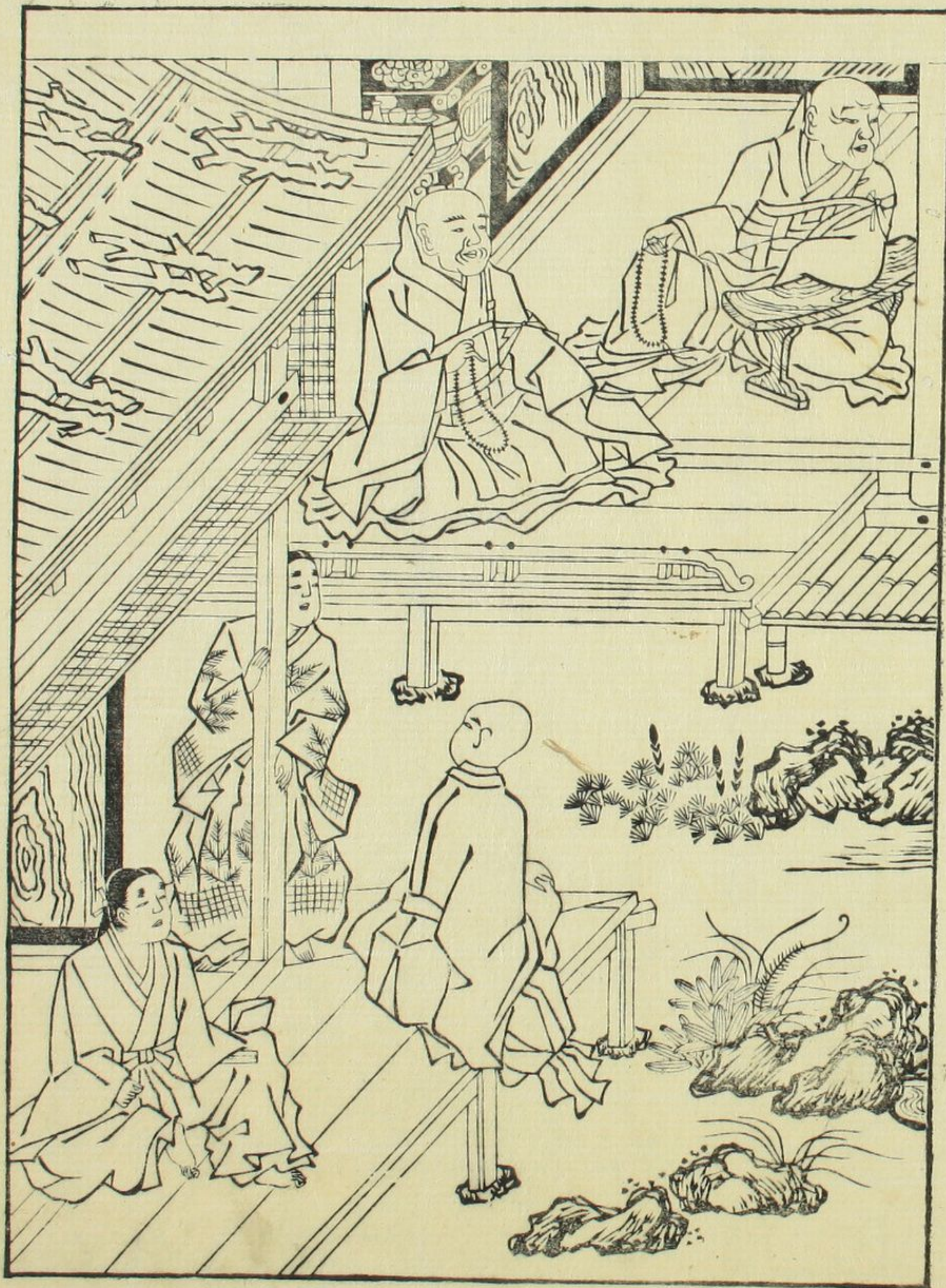
法然上人行状畫圖第十六

高野の僧都明遍あきひろ。少納言通憲すくなごん とうげん。子好こよし。長門ながとの法
師ほし。敏覚びんけつが嫡弟ちやくていとして。三論の真旨まごころ。法ほの才さい名めい
世よよし。はれたる。か。も。名利なかり。は。い。と。ふ。心こころ。う。く
と。て。本寺ほんじ。れ。ま。あ。づ。わ。を。こ。の。ま。は。は。る。り。三十七
れ。ら。交衆かうしゆ。を。の。が。れ。公請こうせい。を。辞ことば。し。光明山くわうみやうざん。よ。居い。を
志こころ。は。て。諸行しよぎやう。を。す。て。以もつ。万善ばんぜん。を。い。は。は。ひ。ろ。く。出離しゆり
の要路やうろ。を。た。げ。祿りやく。あ。ま。ひ。く。顯密けんみつ。れ。勤行ごんぎやう。は。いた

此の時の人明遍、當時無雙に碩学たり。轉任
 遅く此ゆへに籠居する秋のよりなをのくちと
 あひをれい。生年四十五に時小僧都は宣下り此
 公達もがく辞して勅喚よまらるがに。隱道
 此をいひよく切めり。建久六年五十四歳小て
 たくく光明山をすく。跡は高野山りがく。
 出離此はとんますく秘へるわら。有智に道心
 者ちくいこれ人たり







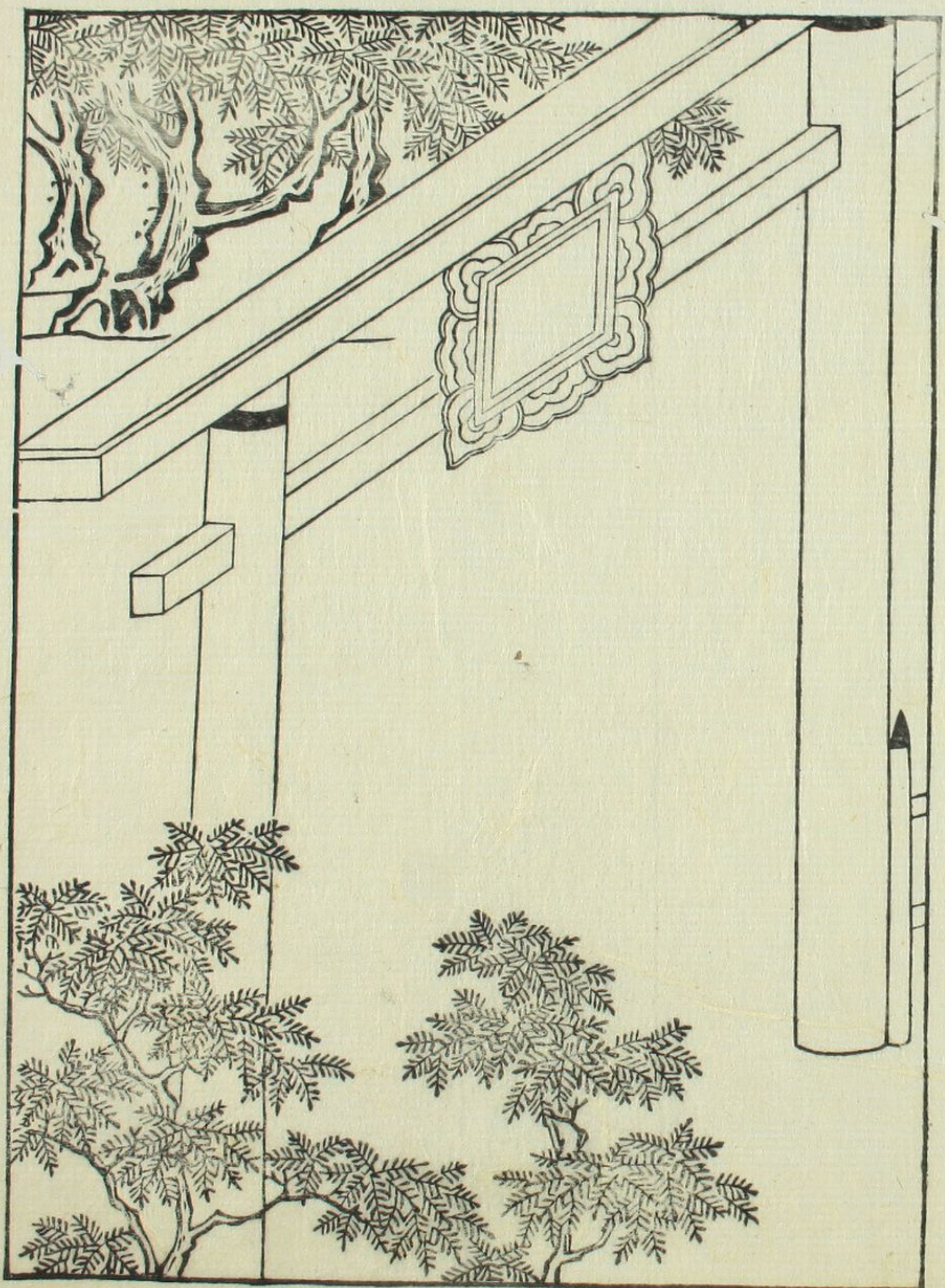
僧都上人所造の選擇集を披覽して。この書の
なりしま。いさ。偏執なること。海あり。千里を
て。寝られたる夜に夢よ。天王寺に西門よ。病者
す。ま。あら。い。ふ。や。こ。ふ。せ。の。故。一。人。の。聖。れ。録。り
か。ん。を。い。れ。て。匙。を。も。ら。て。病。人。れ。口。に。い。さ。く
あ。ら。ら。誰。人。よ。あ。ん。と。と。ふ。り。が。い。さ。な。る
人。こ。へ。て。法。然。上。人。た。り。と。い。ゆ。と。見。く。さ。め。ぬ。僧
都。に。も。ら。く。り。れ。選。擇。集。紙。偏。執。の。文。た。ら。と。思。は

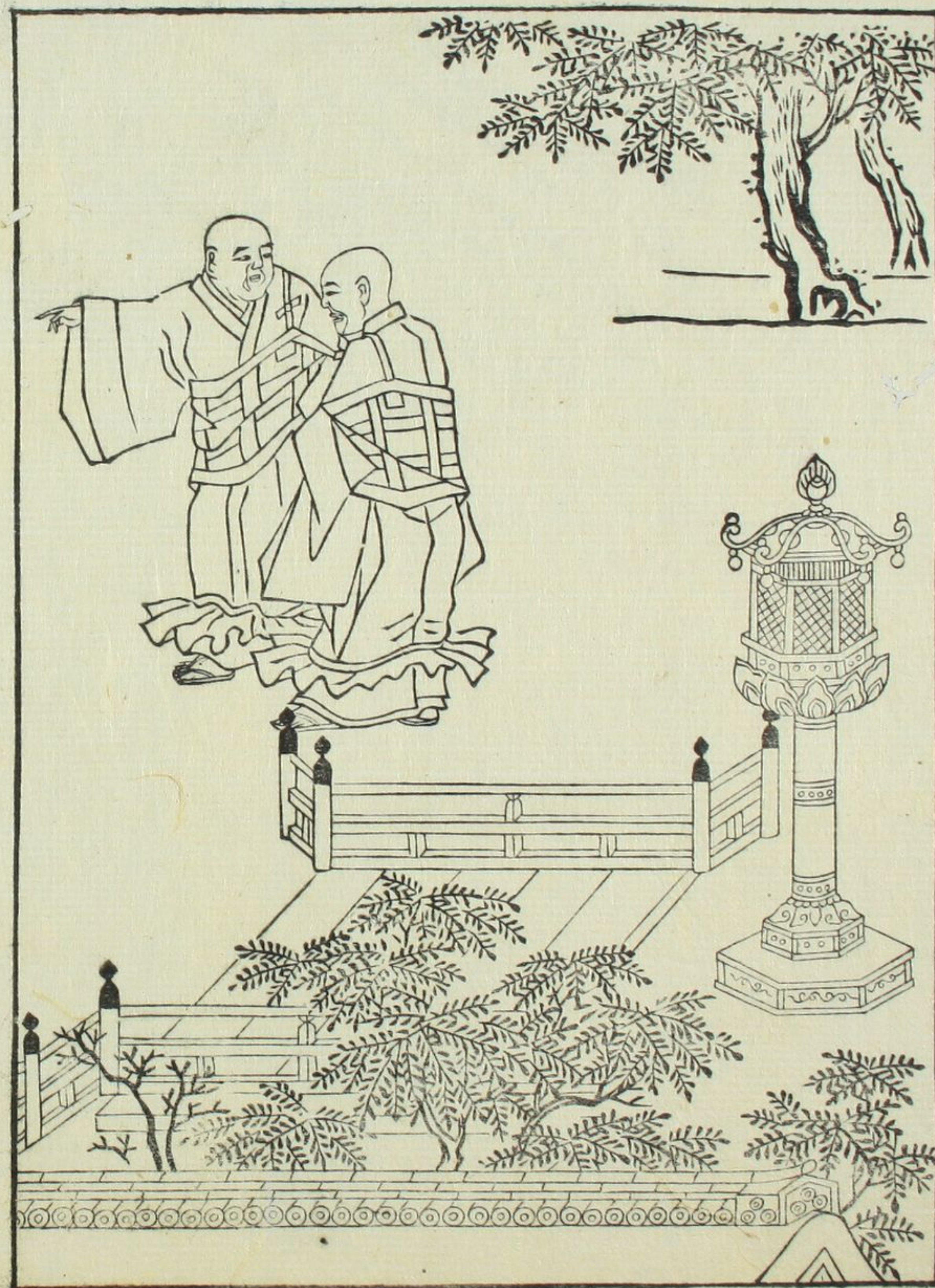
る。海。い。さ。め。い。ゆ。め。あ。ら。く。い。れ。上。人。の。機。を。志
里。時。を。志。わ。た。る。聖。よ。て。た。り。き。ら。病。人。の。極。い。ん
志。め。に。梅。子。搗。梨。子。柿。な。と。れ。を。く。ひ。を。食。す。れ
ご。も。の。ら。は。は。と。れ。も。さ。ま。り。ぬ。き。ば。い。さ。く。よ。お
ま。ゆ。後。ら。て。の。と。後。う。る。か。す。ら。ら。に。余。を。所
へ。ま。ら。か。く。こ。れ。書。よ。一。向。り。念。佛。を。す。く。さ。き
た。る。こ。れ。よ。ま。ら。ら。ら。五。濁。濫。漫。の。世。の。佛。法。の。利
益。淨。身。に。滅。ど。こ。れ。ら。い。あ。ま。り。に。代。ふ。り。て。

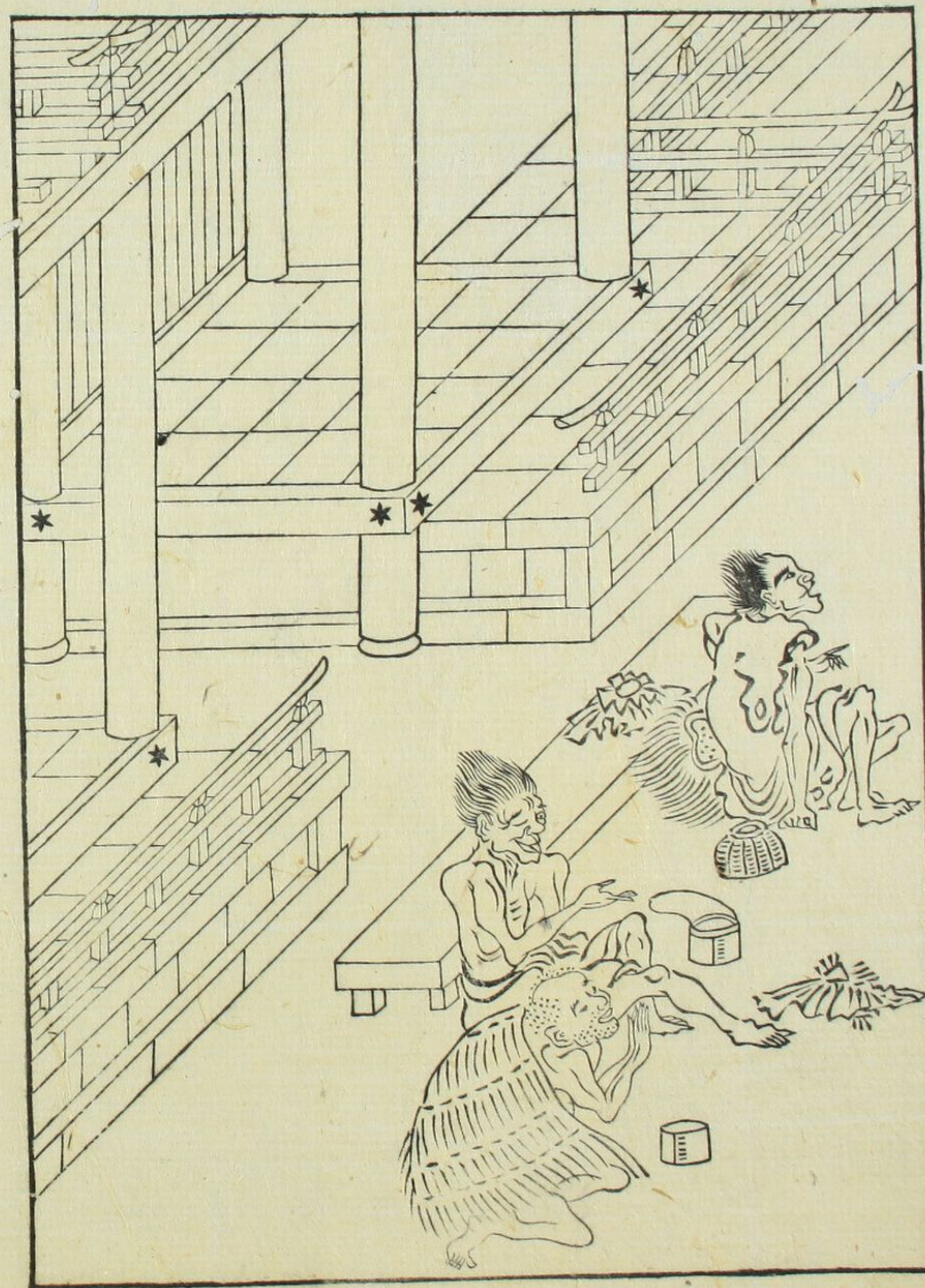
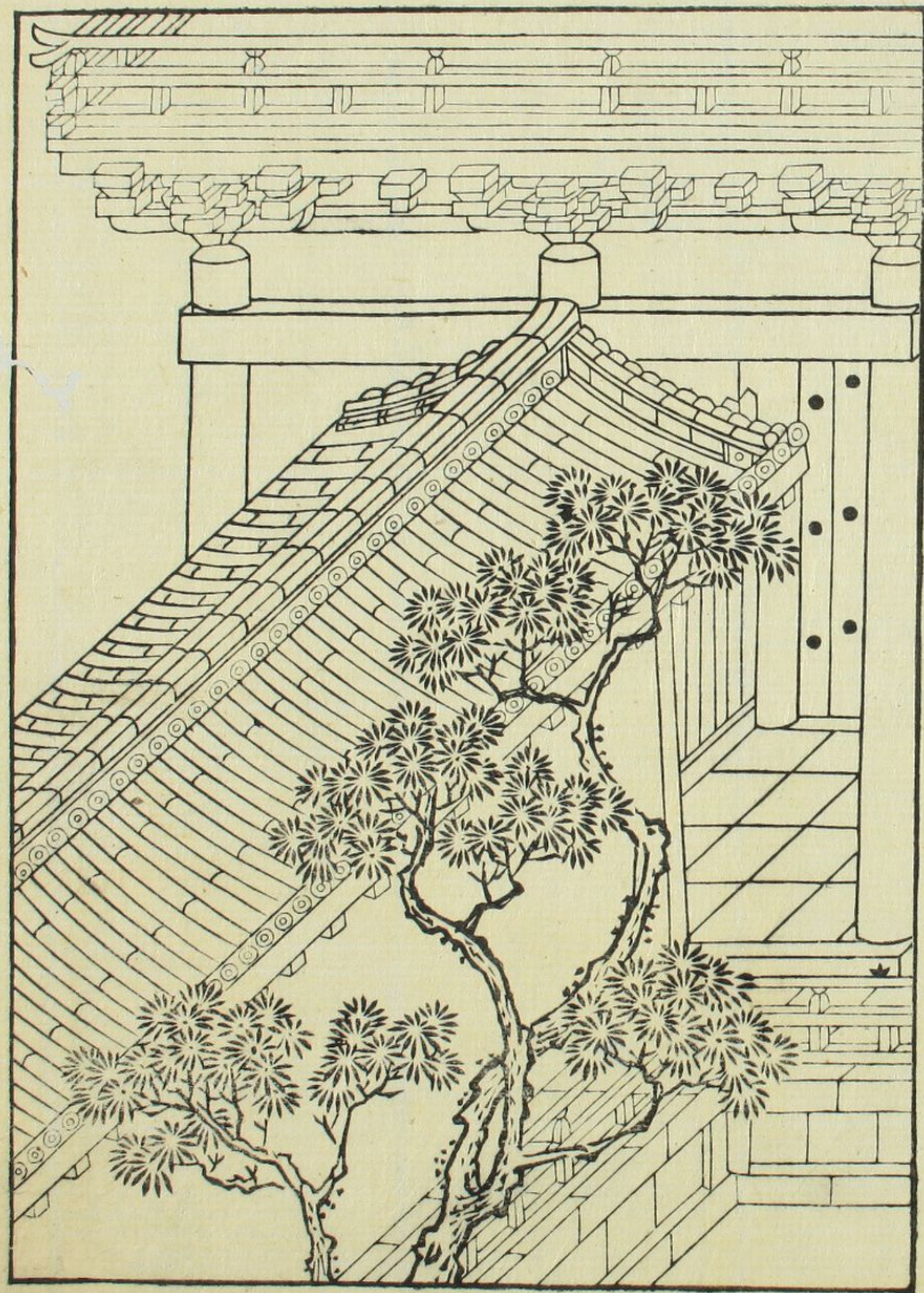
我等ありしは。たゞ人々重病にまひぬ。三
論法相の棋子栴檀せんたんの純淨じゆんじやう真言止觀しんごんしこくの梨子柿
をくまひ。念佛三昧ねんぶつさんまいのなりゆきて。生死をいづべ
きありたり。忽たちり顯密けんみつの諸行しよこうをまきて。
專修念佛せんじゆねんぶつの門かどより。その名を宣阿弥陀佛せんあみだぶつと
号なづせし。我々われらも。天王寺とんとんの我々われらも。
由緒ゆいじゆなり。此こゝの極樂補處ごくらくほじよの觀音大士。
聖德太子といじ。我々われらて。佛法をこゝの國よこゝのくにひるん

終さい。最初さいしよに伽藍がらんあり。欽明天皇きんめんてんに御みためて。七日の
念佛ねんぶつをしめたまひ。命長七年二月十三日。黒木
には御使みつかひといて。善光寺ぜんくわうじに如来にがひへ御書みがきを進すすせ
らる。その御み名号なごう七日にち稱揚しやうやう已い。以もつ斯かゝ為な報はう
廣大恩くわんだいおん。仰願おんがんでん本師ほんし弥勒尊みろくそん。助我濟度すけわしやくど常護念じやうごねんと
侍まじり。如来にがひに御み返報へんぱうよい。一日いちにち稱揚しやうやう無恩留むおんりゆう何
況いかに七日にち大功徳たいこうとく我待衆生われまちしゆじやう心無間しんむかん。汝能濟度にがたしやくど豈不いかんや
護まもごとあらうん。此こゝの御表書みひょうしよよい。上宮かみみやう救世大

聖の御返事と侍らる。此御消息よ。此國
 念佛三昧れ有縁なる事もあり。此よ。此鳥居
 額よ。釋迦如来轉法輪所。當極樂土東門中
 心。こころ。か。か。て。侍。ら。る。國。よ。生。活。う。た。ん。い。を。こ
 の念佛門よ。歸よ。へ。ま。を。れ。た。ら。り



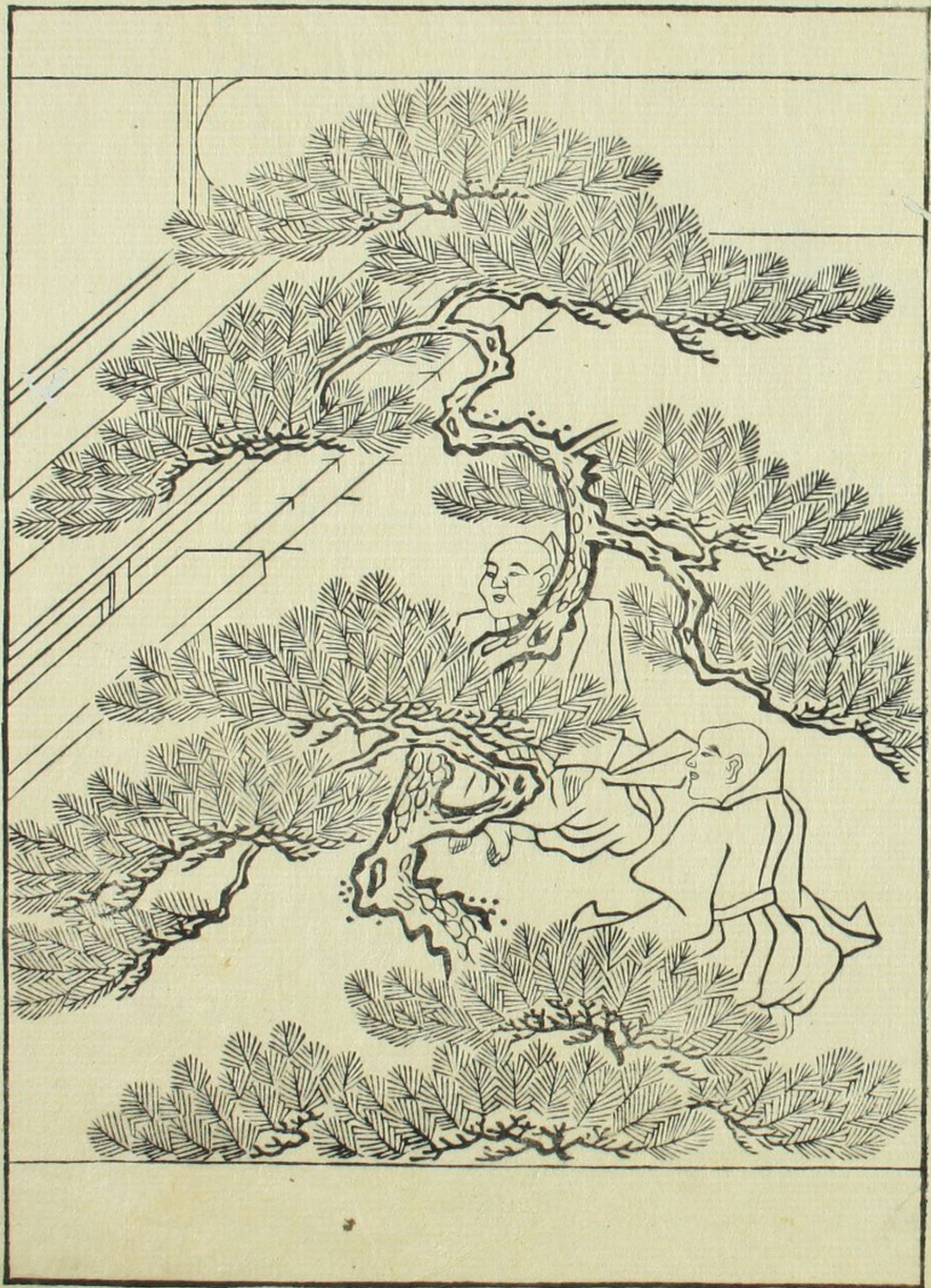


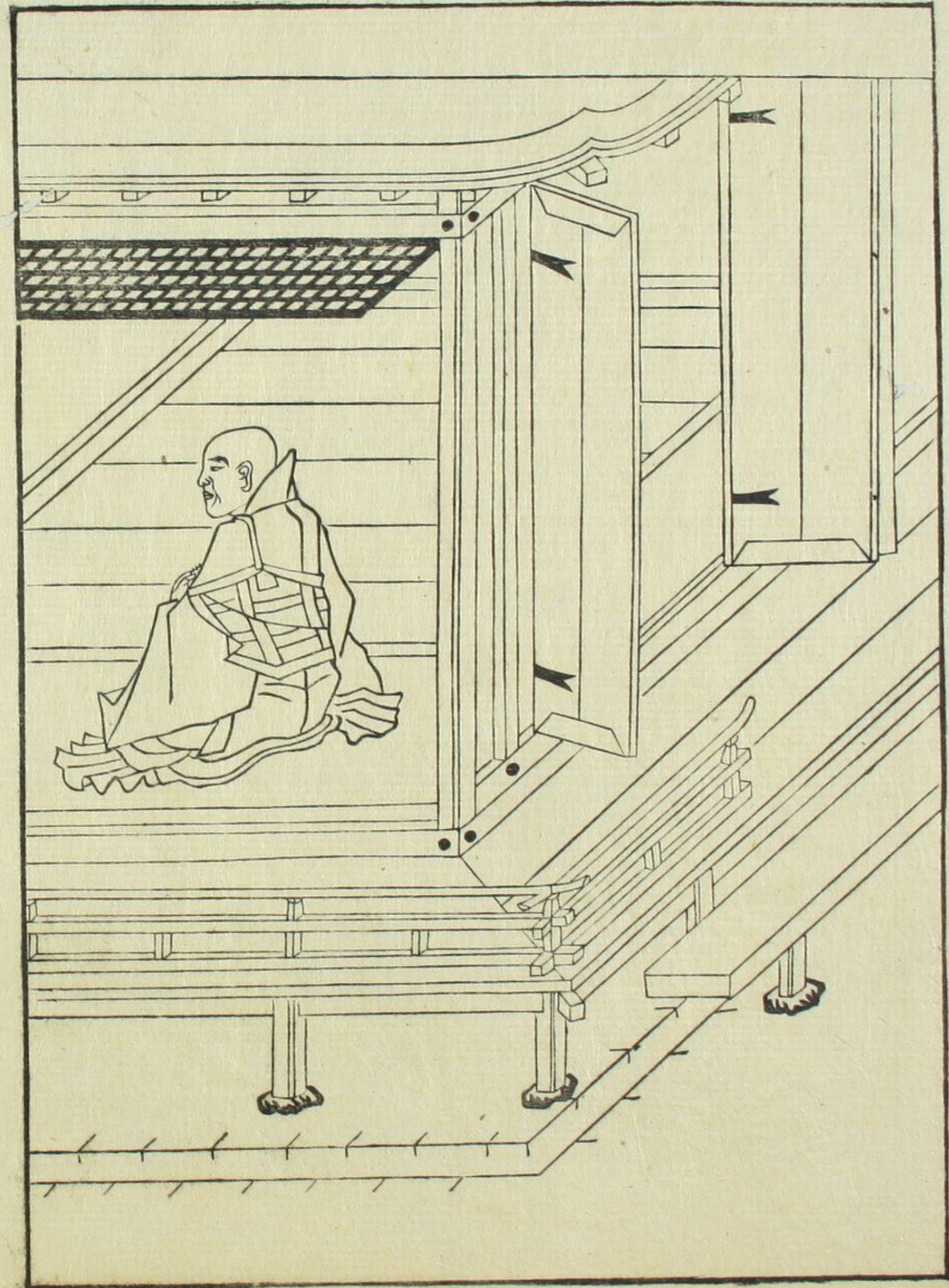
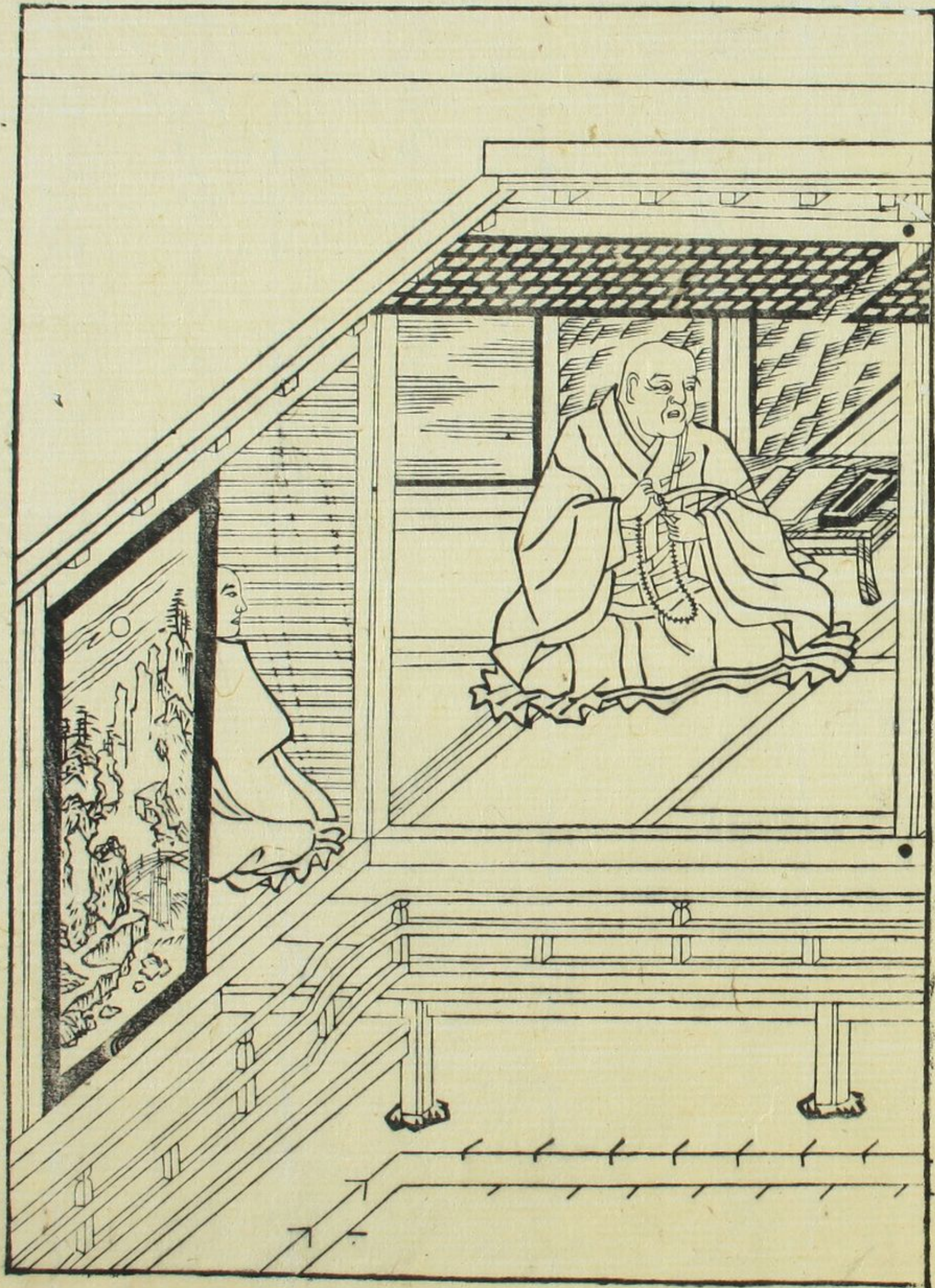


上人天王寺にたりしころに。僧都善光寺系
詣り奉りあむるが。たぐひ系せしれども。川使よそ
案内し。路よよ。上人客殿よ。出まふらるる。こま
へし。僧都。こころいまま。居あやめ。ぬほはに。
これ。い。い。生死を。ん。おれ。供へ。ま。と申
は。れ。ま。ま。南無阿弥陀佛と。唱へ。く。往生。候。と。ま。
ま。い。ま。う。は。と。そ。存。供。へ。と。は。れ。ま。ま。僧都
申。は。れ。ま。う。た。ま。も。ま。い。見。を。よ。ひ。て。侍。ら。た。し

念佛れ。ま。心。の。散。乱。一。妄。念。の。れ。ま。供。を。い。ま。一
遊。ま。と。上。人。の。は。り。欲。界。れ。散。地。に。生。候。と。ま。
心。あ。に。散。乱。せ。ま。ん。や。煩。惱。具。足。の。九。支。い。う。て。妄。念
を。ま。い。へ。ま。そ。れ。條。源。宣。を。ち。ま。ま。の。供。の。心。
ら。り。ま。れ。妄。念。い。ま。を。し。お。こ。は。と。い。ま。も。口。よ。名
号。を。と。あ。い。弥。陀。れ。願。力。よ。乗。し。て。安。定。往。生。と。ま。
一。と。申。は。れ。ま。ま。こ。れ。う。を。給。供。つ。た。め。に。よ。り。て
飛。り。ま。り。と。て。僧。都。殿。と。て。退。出。し。路。よ。た。れ。ん。

初對面此人一言之世間の礼儀此詞なくして退出
 せしれぬことよむこと。人とならばいひなら。お上
 人うらへいらねく心を志ぐめ。妄念れらる。清くして
 念佛せんとねるん。いしむれはすれ。目鼻^{ちんか}はらわん
 たりて念佛せんとねるん。あれはらく
 して。いしむれ。



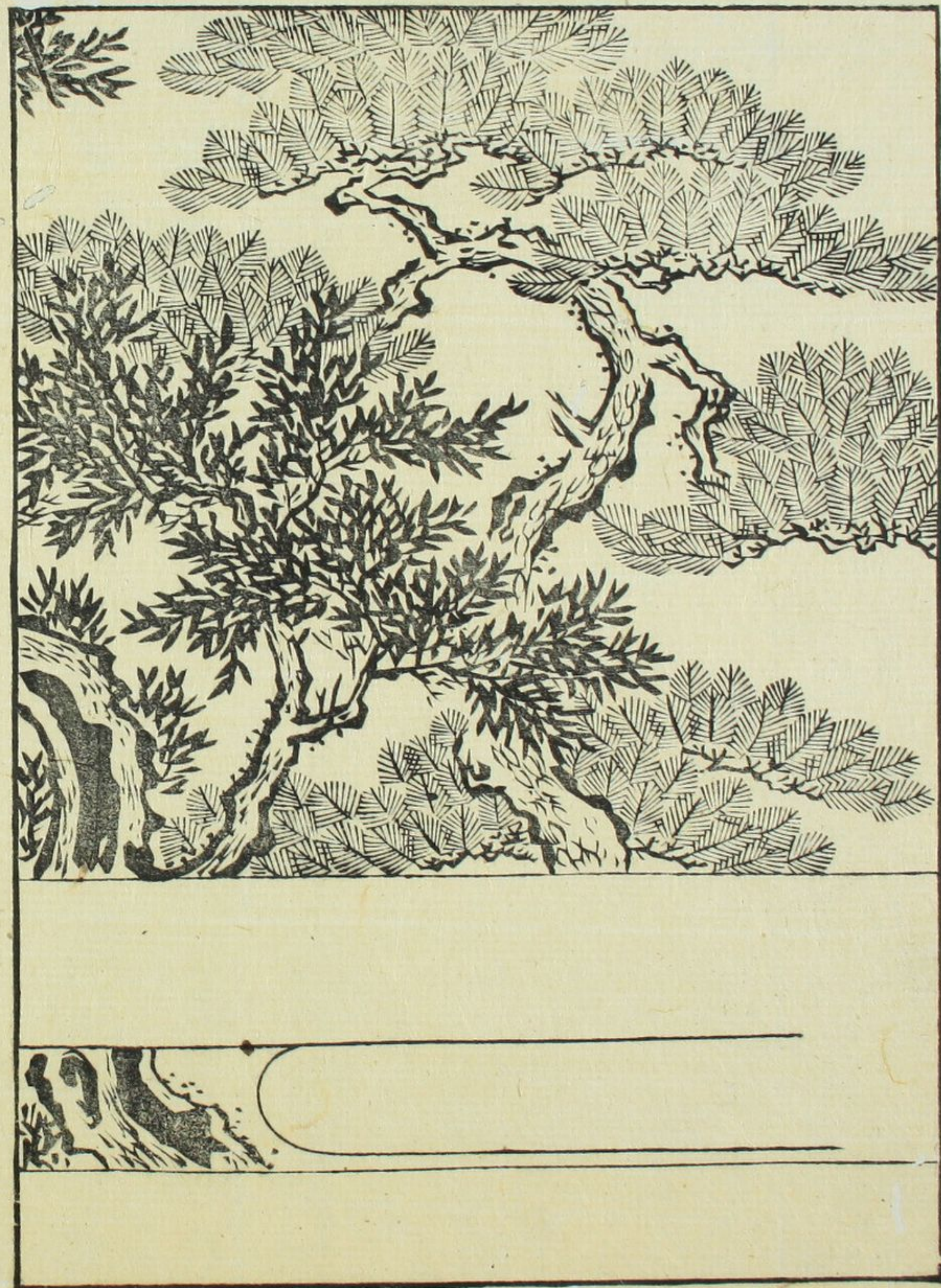


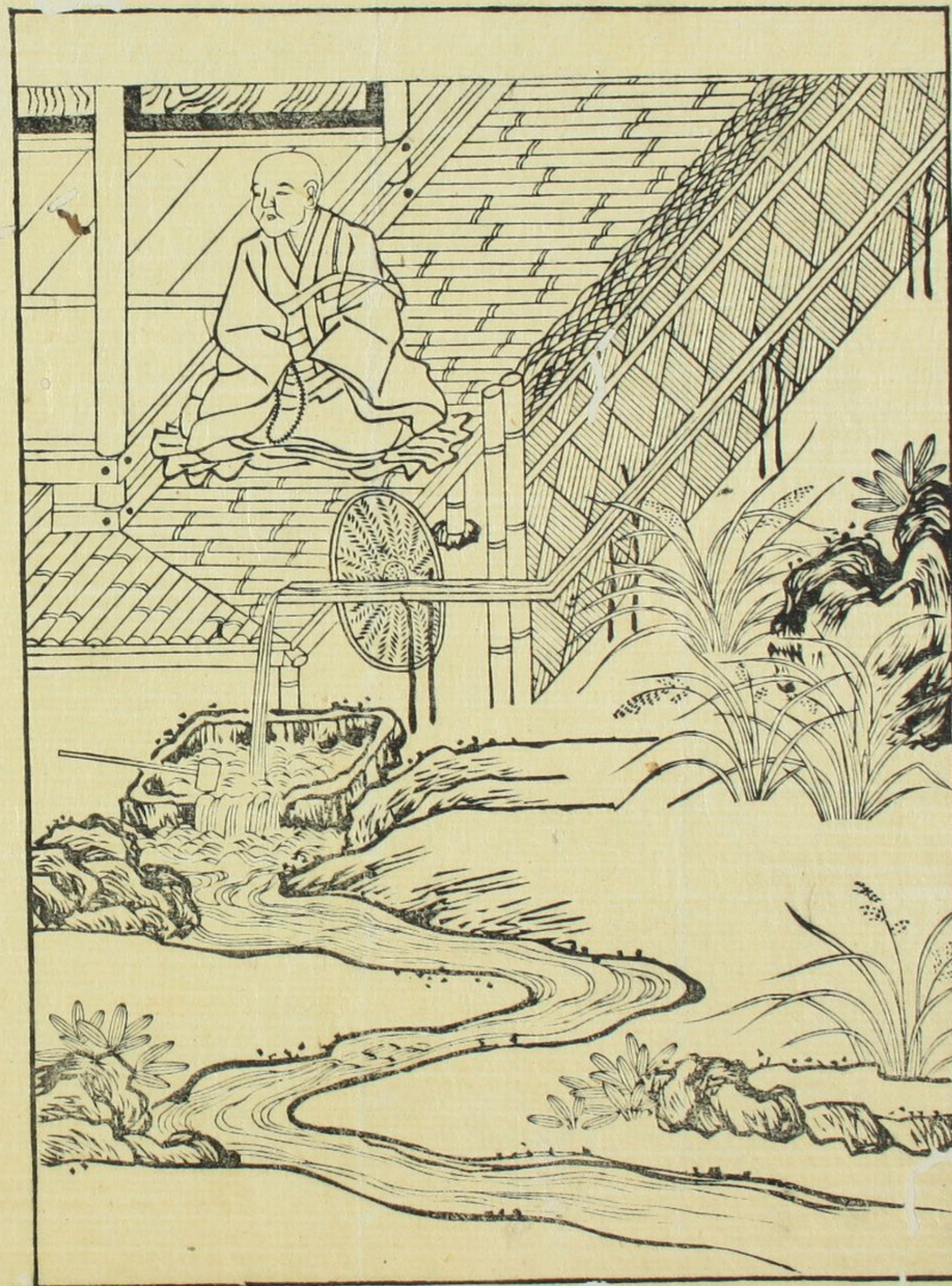
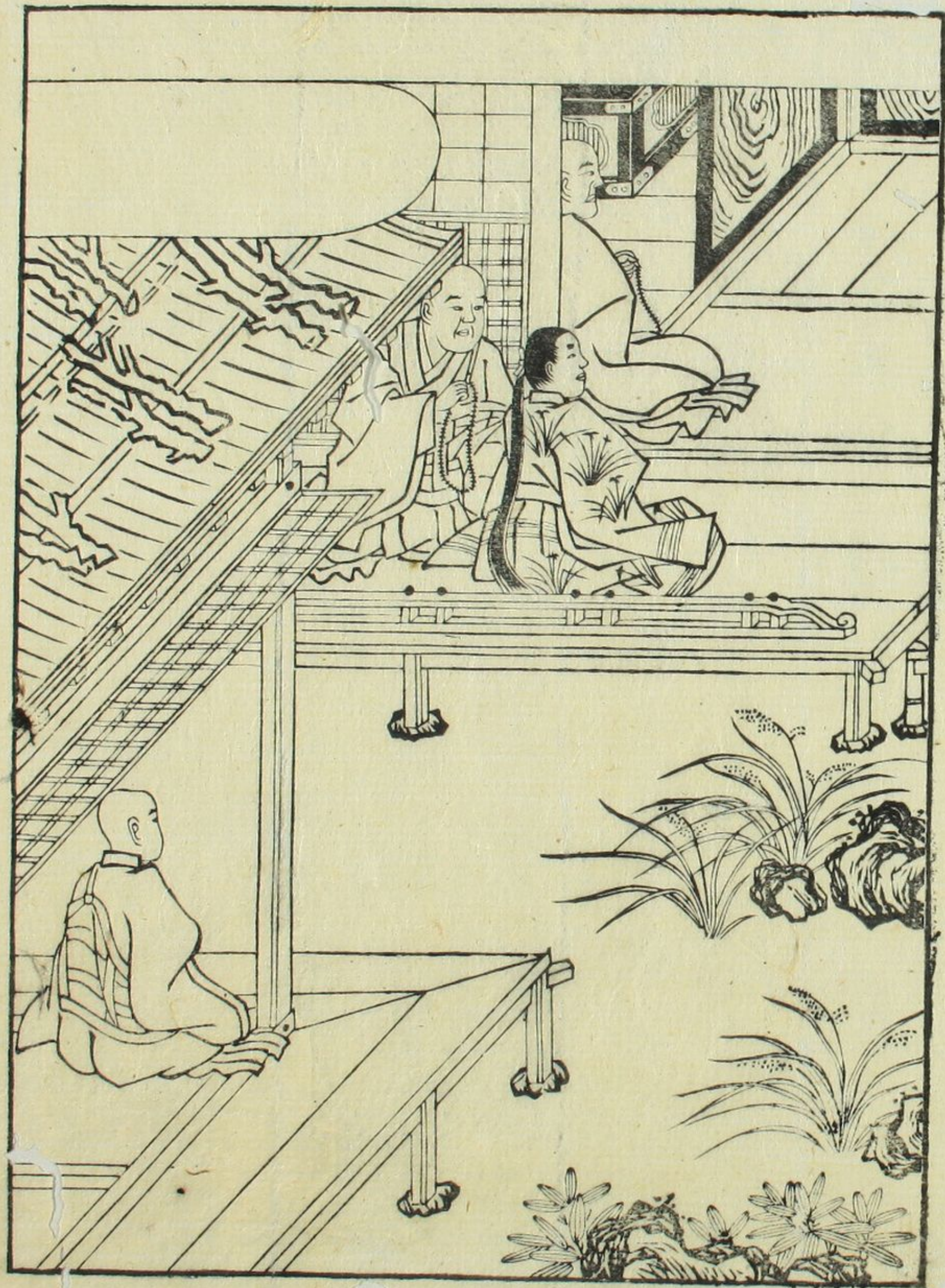
その後の僧都そうづゆく上人じゆんの専修せんじゆ此行こゝろをこころ
 かりたるが念珠ねんじゆをこころもきりて数遍すうへんに不
 き事ことは不實ふじつのまじりたるをこころたかたし
 不受うじゆせしれをこころあるとて修行者しゆぎやうしや一人ひとりきりて
 毎日の念佛まいにちのねんぶついふをこころ所作しよさくとはさむじへ
 遊あそんとたづひ申まをすに法房ほふふいふをこころ程ほどを申
 けりてそのかへりてのれをまじへ毎日百万遍まいにちひゃくまんへん申
 ぶ返答へんたうゆかた例れいは不實ふじつのまじりて返答へんたうに

ま及まび流りゆうしてがら入いれぬまじりて修行者しゆぎやうしやを
 にから僧都そうづらとまじりて入いれぬまじりて貴氣たかきなる
 僧そうまじりてはなごの孫まごとて毎日百萬遍まいにちひゃくまんへんの行
 者しやをいひてあひげぬ事ことをいひてまじりて入いれぬ
 ことをもくはばはなる氣色きしきにてまじりて善導ぜんどう
 たりとて信しんはるんてねえさぬ通とりもあせが
 き曾そさつたてぬ心こゝろをまじりて入いれぬまじりて
 くとほえて時とき尅くいくほど返答へんたうゆかた例れいは

修行者をよびへて。此より後より。前非
をきかんと。人を方より。はりて
後。此より。高野中。後より。後より。つるよ
ゆ。このをきか。後より。僧都申さ。此より。
日來。ゆるちの。數遍を不受と。佛意よ
そ。此より。化人の。此より。後より。つるよ。
實に修行者よ。此より。後より。僧都
う。此より。百萬遍の。數遍を。此より。僧都

此後想をりして。此を思よ。上人數遍をすめ
後。此より。和尚の。尊意よ。此より。つるよ。
た。此より。信。此より。つるよ。
て。此を。此より。事。此より。





僧都ひとへよ上人の勸化を仰信しぬる心なり
 々れん上人の滅後より此遺骨を二期のあひて頭
 にひけてのらよ高野乃大将法下
貞境録倉相傳
右幕下息相傳
 ちこれらの籠山三十年のあひて朝よ六自誓戒
 舍利講クよ臨終れ行儀を修し惣して六
 時の同音念佛日夜よをこころ事なり他の
 事めにん人れの時よに志ころひて顯密の法門
 を談せよまじれも自行よは一向稱名れ外他

事をもへん長齋持戒りて草庵はいつこ
 とれ練行ごゆりて薰修日あつたれども
 穢土れ縁はまて西土の望らるるまじりや貞
 應三年四月上旬れるよりいさゝ風痴をまれ
 寢食例よ遠しれん門弟等をめく結番して
 看病しし念佛乃急をむ時なり病よ志
 けしとも法門の談議日るよかりし日を
 りるまに經論れ明文波誦して念佛いよ

強盛きうせいなり。はるにあり六月十六日子ねのこ尅頭くつづ北西へいせいよ
 して念佛ねんぶつ相續さうぞくし。禪定ぜんじやうよ入いりてく。いまこそえ
 孫まごよりり。生年なまね八十三なり。らんる人ひと随喜ずいきれ感かん
 涙なみだをぬぐもきく人ひと在世せいぜの徳行とくぎやうをぞ志こころしひを
 詠えい



